十八世紀におけるフランス対外貿易の展開過程

服　部　春　彦

はじめに
Ⅰ　研究史の概観と問題の所在
Ⅱ　史料とその問題点
Ⅲ　貿易の成長とそのリズム
Ⅳ　輸出入の地域別構成の変化
Ⅴ　輸出入の商品別構成の変化
Ⅵ　主要商品の輸出入先の変動
おわりに

はじめに

本稿は，18世紀におけるフランス国民経済の形成過程を国際経済ないし世界市場との連関において具体的に把握するための一作業として，この時期におけるフランス対外貿易の展開過程に総括的な検討を加えようとするものである。

今日のわが国での一般的理解によれば[1]，フランスは18世紀中葉の七年戦争を画期として，海外の輸出市場あるいは植民地の争奪戦においてイギリスに決定的敗北を喫し，世界商業におけるイギリスの覇権が確立したとみられている。そして，この覇権の帰趨を決した基本的要因は，英仏両国における工業生産力の格差，とりわけ毛織物工業の優劣にあったと考えられている。これに対して，近年フランスをはじめ欧米の学界で有力となりつつある見解は，フランスの工業や貿易が18世紀に，イギリスの工業や貿易に比べてまさるとも劣らない成長をとげたことを強調するものである。たとえば Fr. クルーゼは，1966年の論文[2]において以下の諸点を指摘している。(1)フランスの対外貿易は，18世紀初

頭から大革命にいたる期間を平均してみれば，イギリスの対外貿易よりも急速に拡大しており，その結果「1716—20年にはイギリスの貿易額の２分の１をほとんど超えなかったフランスの貿易額は，大革命の前夜にはイギリスのそれにきわめて近い水準に到達していた[3]」こと，(2)その上フランスは18世紀に，スペイン貿易やレヴァント貿易など，「国際貿易のいくつかの重要な分野で支配的地位を獲得ないし維持した[4]」こと，(3)さらに，このような「貿易の発展は，イギリスの場合と同様に工業成長の戦略的一要因であった[5]」こと，(4)他方，フランスの工業生産は18世紀初頭から大革命前夜まで，全体としてイギリスの工業生産とほぼ同一の速度で成長をとげていること[6]，(5)こうして大革命前夜にフランスは，石炭，非鉄金属，船舶，綿織物の生産量の点ではイギリスに劣っていたものの，毛織物，絹織物，麻織物と鉄の生産量の点ではまさっており，工業総生産においてもイギリスを凌いでいること[7]，(6)産業革命の先導部門となった綿工業の場合にも，その成長率は英仏両国でかなり似かよっており，この部門でのイギリスの優位も1780年代までは普通考えられるほど大きなものではなかったこと[8]，以上である。

クルーゼの見解は，フランス工業生産のイギリスに対する立ち遅れを一面では認めつつも[9]，18世紀フランスにおける工業と貿易の強力な成長という事実に改めて注意を促したものといえるが，その後1970年に刊行された『フランス経済・社会史』第２巻においてＰ．レオンは，「少なくとも1780年頃までは，二つの工業強国はほぼ同じ歩調で前進したとみられる[10]」と述べつつ，上述の(1)(4)の事実を確認したのである。さらにＴ．Ｊ．マルコヴィッチは，1976年刊行の『フランス工業史』第１巻[11]において，18世紀フランス毛織物生産の成長過程を綿密に検証した上で，「18世紀におけるフランス毛織物工業の成長は，イギリス毛織物工業の成長に匹敵するものであったようにみえる。繊維工業のかくも重要なセクターにおいて，フランスの工業化はイギリスの工業化に対していかなる遅れもとらなかったようである[12]」，と結論している。毛織物工業は産業革命以前のイギリスの主導産業であり，従来わが国ではとくにこの部門におけるフランスの立ち遅れが強調されてきただけに，マルコヴィッチの結論は注目に値いしよう。

以上，フランスの学界における近年の諸見解は，18世紀のイギリス，フランスの経済的発展の並行性，あるいは類似性をとくに強調するものといえる。こ

れらの見解にしたがえば，フランスがその工業生産力の低位性のゆえに，18世紀中葉を画期としてイギリスとの海外市場争奪戦に敗北したとみる前述のわが国での一般的理解は，疑問とされなければならないであろう。だが，ここで注意しなければならないのは，クルーゼとレオンによって，英仏両国の経済発展のギャップを示すつぎのような事実が指摘されていることである。即ちフランスの工業と貿易の成長は，18世紀の前半においてとりわけ急速であり，世紀の後半には目立って緩慢化したのに対して，イギリスの工業と貿易の成長は世紀の前半にはかなり緩慢であって，世紀の後半，とくに1780年頃からにわかに加速化したということである。[13] それでは，このような18世紀中葉を境とするフランスの工業と貿易の成長の緩慢化は，どのような原因にもとづいているのであろうか。また，工業の成長の緩慢化と貿易の成長の緩慢化との間にはなんらかの関連が認められるのであろうか。本稿は，さしあたり対外貿易の展開過程の考察をつうじて，こうした点に若干の光をあてようとするものであるが，つぎに18世紀のフランス対外貿易に関するこれまでの研究をふりかえり，問題点をより明確にすることにしよう。

（1） たとえば，大塚久雄『近代欧州経済史序説』(『大塚久雄著作集』第2巻，岩波書店，1969年，所収)，134—138頁；遅塚忠躬「経済史上の18世紀」(『岩波講座世界歴史』第17巻，1970年，所収)，67—72頁，などを見よ。

（2） Fr. Crouzet, Angleterre et France au XVIIIe siècle. Essai d'analyse comparée de deux croissances économiques, *Annales*, *E.S.C.*, t. 21, nº 2, 1966.

（3） Ibid., pp. 261—262. なお，ここでのイギリスとは England & Wales を指す。

（4） Ibid., p. 263.

（5） Ibid., p. 265. ただし，この点に関してはクルーゼの見方は一般的に支持されているとはいいがたい。むしろ学界の大勢は，18世紀フランスの工業成長に対する貿易の役割を否定的にみる見解に傾いているように思われる。

（6） Ibid., p. 266. 両国とも工業生産の年平均成長率は1％強とみつもられている。

（7） Ibid., pp. 267—268.

（8） Ibid., p. 267.

（9） クルーゼは，フランスが人口1人当りの工業生産額においてイギリスに及ばなかったこと，また，国民総生産にしめる工業生産物の割合や，輸出にしめる工業生産物の割合もイギリスの方がはるかに高かったこと，を指摘している。Ibid., pp. 265, 268, 271.

（10） P. Léon, L'élan industriel et commercial, dans *Histoire économique et sociale de la France*, dirigée par F. Braudel et E. Labrousse, t. II: *Des derniers temps de l'âge seigneurial aux préludes de l'âge industriel (1660-1789)*, Paris, 1970, p. 527. またレオンは本書の別の箇所で，フランス工業が大革命までスペイン，レヴァント両市場を支配していたことを指摘している。Cf. *Ibid.*, p. 229.

(11) T.J. Markovitch, *Histoire des industries françaises*, t. I: *Les industries lainières de Colbert à la Révolution*, Genève, 1976.

(12) T.J. Markovitch, L'évolution industrielle de la France au XVIIIe siècle, *Revue d'his. écon. et soc.*, vol. 53, nos2-3, 1975, p. 278. 彼によれば，フランスの毛織物工業は1702—04年から1784—86年にいたる間に生産量を144.5%だけ増加させたが，これは18世紀におけるイギリス毛織物工業の成長率150%に非常に近い。Cf. P. Deane and W.A. Cole, *British Economic Growth, 1688-1959*, 2nd Ed., Cambridge, 1969, p. 61.

(13) Crouzet, op. cit., pp. 263—264, 269; Léon, op. cit., pp. 503, 505.

I　研究史の概観と問題の所在

18世紀フランスの対外貿易については，同時代人であるアルヌー[(1)]やシャプタル[(2)]が既に詳細な分析を加えているが，この主題についての歴史学的研究の出発点とみなすべきものは，今世紀初頭に出たE．ルヴァスールの『フランス商業史』第1巻[(3)]であろう。ルヴァスールはこの書において，16世紀前半から大革命までのフランス貿易政策の展開を，関税制度，特権貿易会社制度，通商条約政策，植民地政策などの側面にわたって概観するとともに，それらの政策との関連において貿易（輸出と輸入）そのものの推移をあとづけているが，注目すべきは，彼が上述のアルヌーやシャプタルの統計的研究にもとづいて，18世紀フランス対外貿易の成長過程と構造とについて一定の計量的分析を行なっていることである。即ち，彼は1716—88年を10の時期に区分して輸出入額の変動を考察するとともに，1716年と1787年とについて輸出入の商品別および地域別の構成を大づかみながら明らかにしているのである[(4)]。

ルヴァスールの著書公刊の前後から今日までの間に，18世紀フランス対外貿易に関しては夥しい数の個別実証研究がつみ重ねられてきた。そうした個別実証研究は1960年頃からとくに数多く発表されるようになったが，それらは，ボルドー，ナント，マルセイユ，ル＝アーヴルといったフランスの貿易港ごとに，その貿易活動を詳細に分析したもの[(5)]と，オランダ，レヴァント，アメリカ植民地，西アフリカ，アジア等々の貿易相手地域ごとに，それらとフランスとの貿易関係の推移を追跡したもの[(6)]とに，大別できる。これらの諸研究は，上述の貿易港および貿易セクターについて，船舶の出入港数と総トン数，輸出入商品の数量と価額などの短期的および長期的変動を克明に明らかにしているだけでなく，貿易取引の決済方法，会計技術，会社の組織形態から利潤の変動，さらに

は貿易商人の経済的社会的存在形態にまで分析を加えつつ，当時における貿易活動のあり方を多面的かつ具体的に解明している。

以上のように，18世紀フランス対外貿易の研究は，地域別，セクター別の個別実証研究として近年めざましい進展を示しているが，にもかかわらず，フランスの対外貿易が18世紀に全体としてどのような進化をとげたのかという点は，なお十分に解明されているとはいいがたいように思われる。確かに，年々の輸出入の各総額とその相手地域別の構成とについては，1780年以前に限られているとはいえ，今日望みうる最も正確なデータがR．ロマーノ[(7)]によって提供されているが，しかし，輸出入の商品別構成については，ルヴァスールの研究以後，十分な資料の蒐集と分析にもとづく本格的な研究は現われていないといわねばならない。たとえばP．レオンは，前掲の『フランス経済・社会史』第2巻において18世紀フランス対外貿易の発展について述べているが[(8)]，そのさい彼は，輸出入の商品別構成についてはアルヌーの統計によって1716年と1787年との状況を比較しつつ，輸入に占める食料の割合の低下，原料と製造品の割合の安定，植民地物産の絶対的増加と相対的減少，また輸出に占める製造品の割合の低下と植民地産品を含む食料の割合の安定，といった事実を指摘するにとどまっている[(9)]。レオンはまた，より最近の論文において，18世紀におけるフランス工業の発展が貿易構造のあり方をどのように変容せしめたかを考察して，「フランス工業生産物輸出の著しい量的増加と，それにともなう質的諸変化とは，18世紀末には，フランス対外貿易の構造を根本的に変更するにいたっていない[(10)]」という結論を引き出した。だが，その場合にも彼は，貿易構造のあり方については1716年と1787年との二つの時点の間の比較を行なうにとどまっている。このように，現在までの研究においては，18世紀の初頭と大革命の直前との中間の時期における輸出入の商品別構成を明らかにするという作業が，フランス対外貿易の全体については全く行なわれていないのである[(11)]。このことは，18世紀におけるフランス対外貿易の構造的進化を同じ時期の工業生産の発展と関連づけて考察しようとする場合，つぎに述べるように致命的な欠陥をなすと考えられる。

従来の諸研究が教えるところによれば[(12)]，フランスの工業生産は1715—20年頃から成長過程に入り，とくに1730年頃から全般的かつ急速な成長を経験するにいたったが，世紀の中葉以後この成長は緩慢化し，ついで1770年頃からは繊維

工業を中心とする伝統的諸工業[13]において長期の不況ないし停滞が生じたとされている。このような18世紀における工業成長の諸局面を考慮するならば，工業的発展と貿易の構造変化との関連の解明にとって18世紀の初頭とその末葉とについての考察のみでは不十分なことは明らかであろう。レオンは，フランス諸工業が18世紀前半の全般的成長を経験する以前の1716年の貿易構造と，フランス諸工業が世紀後半の長期の不況を経験した後の1787年の貿易構造とを比較して，総輸出に占める製造品の比率が幾分低下したことを指摘しているのであるが，われわれが考察しなければならないのは，18世紀前半の全般的成長，世紀中葉以降の成長の緩慢化，1770年以降の停滞ないし不況という，工業成長の三つの局面のそれぞれに対応する貿易構造のあり方，もしくは変動であろう。次節では，そのような考察のために筆者が利用する史料について若干述べておくことにする。

（1） Ambroise-Marie Arnould, 貿易差額事務局（後述）の副長官。主著は, *De la balance du commerce et des relations commerciales extérieures de la France dans toutes les parties du globe, particulièrement à la fin du règne de Louis XIV et au moment de la Révolution*, 2 vol. plus 1 vol. de tableaux statistiques, Paris, 1791.

（2） Jean-Antoine Chaptal, ナポレオンの執政政府下の内務大臣。主著は, *De l'industrie française*, 2 vol., Paris, 1819.

（3） E. Levasseur, *Histoire du commerce de la France*, t. I, Paris, 1911.

（4） *Ibid.*, pp. 511—523. ルヴァスールがアルヌーの統計表にもとづいて作成した1716年と87年の輸出入商品の構成表（*Ibid.*, p. 518）は，しばしば引用されるものであるが，そこにはヨーロッパ以外との貿易の品目別が示されていないほか，アルヌーの数字の写し誤りが数多く見出される。

（5） 重要なもののみをあげるならば，ボルドーについては，前世紀末に出た Th. Malvezin, *Histoire du commerce de Bordeaux depuis les origines jusqu'à nos jours*, 4 vol., Bordeaux, 1892, t. III: *XVIIIe siècle* がなお価値を失っていないが，比較的近年の成果として，Fr. Crouzet, R. Pijassou et J.-P. Poussou, Économie et société (1715-1789), dans *Histoire de Bordeaux*, t.V, *Bordeaux au XVIIIe siècle*, Bordeaux, 1968; P. Butel, *Les négociants bordelais. L'Europe et les Iles au XVIIIe siècle*, Paris, 1974; Ch. Huetz de Lemps, *Géographie du commerce de Bordeaux à la fin du règne de Louis XIV*, Paris, 1975. ナントについては，Gaston-Martin, *Nantes au XVIIIe siècle. L'ère des négriers*, Paris, 1931; J. Meyer, *L'armement nantais dans la deuxième moitié du XVIIIe siècle*, Paris, 1969. マルセイユについては，R. Paris, *Histoire du commerce de Marseille*, t. V: *De 1660 à 1789. Le Levant*, Paris, 1957; G. Rambert, *Histoire du commerce de Marseille*, t. VI: *De 1660 à 1789. Les colonies*, Paris, 1959;Ch. Carrière, *Négociants marseillais au XVIIIe siècle*, 2 vol., Marseille, 1973. ル＝アーヴルとルアンについては，P. Dardel, *Navires et marchandises dans les ports de Rouen et du Havre au XVIIIe siècle*, Paris, 1963; do., *Commerce, industrie et navigation à Rouen*

et au Havre au XVIIIe siècle, Rouen, 1966.

(6) オランダとの貿易については，M. Morineau, La balance du commerce franco-néerlandais et le resserrement économique des Provinces-Unies au XVIIIe siècle, *Economisch Historisch Jaarboek*, XXX, 1965. レヴァントとの貿易については，P. Masson, *Histoire du commerce français dans le Levant au XVIIIe siècle*, Paris, 1911. アメリカ，西アフリカ両植民地との貿易については，J. Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime*, 2 vol., Paris, 1972. アジア貿易については，L. Dermigny, *Cargaisons indiennes. Solier et Cie (1781-1793)*, 2 vol. Paris, 1960; do. *La Chine et l'Occident. Le commerce à Canton au XVIIIe siècle*, 3 vol., 1 album, Paris, 1964.

(7) R. Romano, Documenti e prime considerazioni intorno alla ((Balance du commerce)) della Francia dal 1716 al 1780, in *Studi in onore di Armando Sapori*, Milano, 1957, t. II, pp. 1267—1299.

(8) Léon, op. cit., pp. 499—512.

(9) Ibid., pp. 507, 509. ただし，レオンのこの指摘，また彼があげる数字には，アルヌーの統計にてらしてみても疑問の点がある。これについては，本稿第V節の叙述を参照。

(10) P. Léon, Structure du commerce extérieur et évolution industrielle de la France à la fin du XVIIIe siècle, dans *Conjoncture économique, structures sociales: Hommage à Ernest Labrousse*, Paris et La Haye, 1974, p. 415. レオンは，18世紀末のフランス対外貿易にしめる食料と植民地物産の重要性を強調しつつ，この貿易構造のうちに「進歩」と「停滞」の二重性を指摘する。

(11) レオンはこの作業の必要性を認識していたようである。彼は「この緩慢な進化の時期の間に，とりわけ1750—60年から1780—85年にいたる時期の間に，『国民的』貿易に占める製造品の割合はいかなるものであるか」(Idem. 傍点は引用者) と問うている．しかし，レオンは一つには同一の観察者（アルヌー）が蒐集したデータの間の比較を行なうため，また一つには「非常に長期間の比較の方が，われわれの目的にとってより大きな論証力をもちうると考えた」ために，1716年と87年との比較のみを行なったのである。Cf. Ibid., pp. 408—409.

(12) 以下の点を最初に明確にしたのは，E. Labrousse, *Esquisse du mouvement des prix et des revenus en France au XVIIIe siècle*, 2 vol., Paris, 1933 であり，レオンの上掲論文 (P. Léon, Structure du commerce, pp. 415—419) は，最近までの研究成果を要約している。簡潔には，Crouzet, op. cit., pp. 268—269 を参照。

(13) 伝統的諸工業とは，羊毛・麻・絹の三繊維工業のほか，小規模金属工業，製紙業，皮革工業などを指す。これに対して，石炭・製鉄業，綿工業，化学工業など新来の諸工業は，18世紀後半にも高い成長率を示す。Cf. Léon, Structure du commerce, pp. 415—420.

II 史料とその問題点

18世紀フランス対外貿易の展開過程を分析するにあたって，筆者が主に利用する史料は，貿易差額事務局 Bureau de la Balance du Commerce[(1)] によって作成された全フランス的な年次貿易統計である。貿易差額事務局とは，フランス絶対主義政府がスペイン継承戦争後の1713年に，王国の貿易活動に関するあら

ゆる情報の蒐集を目的として創設した役所であるが，この役所による全国貿易統計の作成は次のようなプロセスで行なわれた[2]。即ちまず全国の約30の総管区(ジエネラリテ)のうち，国境または海岸沿いの約20の総管区において，それぞれの関税徴収請負事務所 direction de la ferme des traites が毎年，商人の申告にもとづいて，その管区内の税関を通じて輸出入された商品の数量を相手地域別および品目別に詳述した報告書を作成し，これを中央の貿易差額事務局に送付する。貿易差額事務局はこの報告書の写しを各地の商業会議所 chambres de commerce に送って，各商品の単価と総額とを査定，記入させる。しかるのち，貿易差額事務局は写しを回収し，こうしてえられた情報を集約して，各商品の数量と価額とを記した輸出入の全国的な台帳を作成する。貿易差額事務局は1716年から統計作成の作業を開始し，フランス革命初期の1791年まで存続したが，しかし，この期間のすべての年度にわたって包括的網羅的な貿易統計が作成されたわけではない。また，作成された統計の中にも，種々の事情で散逸してしまったものが少なくないようであるが，しかもなお，現在われわれの手には，以下にあげるようなきわめて豊富な統計資料が残されているのである。

(1) あらゆる輸出入商品について，それぞれの数量，価額，輸出入先を示した一覧表[3]。

A　すべての貿易相手地域を網羅しているもの（1772，1775—80，1787—89の各年度について。ただし，1787—89年は輸出入商品の数量の記載を欠く）。

B　東インドを除くすべての貿易相手地域を網羅しているもの（1754—61の各年度について。ただし，輸出入商品の数量の記載を欠く）。

C　フランス領植民地を除くすべての貿易相手地域を網羅しているもの（1752，1782，87の各年度について。ただし，1752年は数量の記載を欠く）。

D　貿易相手国別または相手地域別に作成されたもの（すべての，またはほとんどの相手国・相手地域について存在するのは，1750—51，1787—88の各年度）。

(2) その輸入額が輸出額を10万リーヴル以上，上まわっている商品，およびその輸出額が輸入額を10万リーヴル以上，上まわっている商品について，それぞれ輸出入額を示した一覧表[4]（1766，1770—81の各年度について）。

(3) 貿易差額事務局の長官であったブリュイヤールが1772年に，原統計にもとづいて作成した，相手国別・相手地域別の年々の輸入額と輸出額を示した総括表（1716—72年に関する連年統計[5]）。

さて，この貿易差額事務局に由来する貿易統計[6]は，部分的には既に多数の研究において利用されており，その一部，即ち上記(3)の統計はロマーノによって公刊されている[7]が，しかしこれに全面的ないし体系的な分析を加えた研究はまだ存在しない。そこで，この貿易統計に依拠するさいには，まずその史料的価値について若干ふれておく必要があろう。この貿易統計については，これまでいくつかの欠陥が指摘されてきているが，主な問題点は次の三つである[8]。第一は，統計作成の基礎となった商人の申告における不正行為 fraude や，純然たる密貿易 contrebande の横行のために，統計にあらわれた輸出入商品の数量は実際の取引量を正確に表わしてはいないという点である。第二は，ドイツとの国境に位置するアルザス・ロレーヌ両州が，関税制度上外国と同じ扱いをうけていたために，これら二州と外国との間の商品取引は商人による申告の対象とはならず，したがって貿易統計には含まれていないという点である[9]。そして第三は，各地の商業会議所が貿易差額事務局に報告した個々の輸出入商品の価格が，同じ商品の実際の価格とは一致しないという点である。

それでは，貿易統計がはらむ以上の問題点についてわれわれはどのように考えたらよいであろうか。まず第一の，商人による不正行為の横行が貿易統計の史料的価値を甚だしく損っているのではないかという点については，今日の研究者は一般に否定的であり，むしろ輸出入商品の数量に関する評価は十分に正確であるとする見方が支配的である[10]。しかし，密貿易の存在自体は否定されえないから，貿易統計，とりわけ輸入統計の数字は，つねに過小評価の誤りを含んでいると考えなければならない[11]。つぎに第二のアルザス・ロレーヌの問題についていえば，この二州の外国貿易統計が残っていないことは，フランスとドイツとの間の貿易の正確な把握を不可能にするが[12]，しかしそのためにフランス対外貿易の全体像が著しくゆがめられることはないであろう。われわれの分析にとって決定的な意味をもつのは，第三の，貿易統計における価格および価額評価の信頼度の問題である。この点について今日一般に認められていることは，価格の査定をゆだねられた商業会議所が輸出入商品の価格の年々の変動を考慮することなしに，同一の価格を数年にわたって採用しているが故に，貿易統計

における価額の評価は数量の評価に比べて正確でないということである。[13] 貿易統計に示された各商品の輸入額，輸出額が実際の支払額と正確に一致しないことは確実であり，したがってこの統計にもとづいてフランスの対外貿易のバランスや国際収支の状態について結論を下すことはさけるべきであろう。[14] だがそれにもかかわらず，輸出入の価額に関するデータは，それがもつ限界に注意を怠らないかぎり，[15] フランスの輸出入の成長過程とその商品別，地域別の構成の基本的特徴を析出するための資料としては，十分に利用可能であると考えられる。この点については，貿易統計における商品の価格評価を，同じ商品の輸入先または輸出先における価格評価と比較することが，一つの手がかりを与えるが，M. モリノーはオランダとの貿易における主要商品についてそうした検証を行なって，「貿易統計に記載された価格は典型的 représentatifs なものとして受け入れられねばならない」[16] と結論しているのである。

筆者が利用する貿易統計には他にも若干の問題点が含まれているが，それについては行論の中でふれることにして，以下具体的分析に入ることにしよう。[17]

（1） この役所の正式の名称は，1780年までは Service de la Balance du Commerce であったが，今日では全期間を通じて Bureau de la Balance du Commerce と呼ぶことが多い。この役所の成立事情と活動内容については，Cf. B. Gille, *Les sources statistiques de l'histoire de France. Des enquêtes du XVIIe siècle à 1870*, Genève, 1964, pp. 96—97; M. Beaud, Le Bureau de la Balance du commerce (1781—1791), *Revue d'histoire économique et sociale*, vol. 42, nº 3, 1964,; Morineau, op. cit., p. 179; P.A. Harang, *Essai d'analyse graphique de deux balances commerciales de l'Ancien Régime (1754, 1772) et recherche d'une évolution*, dactyl., Paris, 1975, pp. 11—12.

（2） この点については，Dardel, *Navires et marchandises*, p. 16を参照。

（3） 下記の A, B, C は "Objet général du commerce de la France avec l'étranger (et les Isles françaises de l'Amérique)" と題されている（ただし，Aの1787—89年のもののみは，"Résumé général de la valeur totale du commerce de l'Empire français avec chaque puissance" というタイトルをもつ）。また，下記Dの一覧表は "Objet du commerce de la France avec……", "Tableau récapitulatif du commerce de la France avec……" 等と題されている。なお，これらの一覧表のうち，1750—51年度のものはコート=デュ=ノール県サン=ブリュー Saint-Brieuc の Bibliothèque Municipale に，1752, 54—61, 72 の各年度のものはルアン Rouen の Bibliothèque Municipale に，1775—80, 82, 87—89年のものはパリの Archives Nationales に，それぞれ所蔵されている。

（4） この一覧表は，"Extrait de la Balance du Commerce" と題され，ルアンの Bibliothèque Municipale に所蔵されている。

（5） Archives nationales, F[12] 643 et 1834A.

（6） なお，貿易差額事務局に由来する貿易統計は，上掲のものがすべてではなく，他にも自由港ダ

ンケルクの輸出入額（1766, 71—81年），各総管区ごとの輸出入額（1756, 66, 70, 73—81年）を記した一覧表などが存在する。

（7） Romano, op. cit. ロマーノは上掲(1)Aの史料にもとづいて，上掲(3)の Bruyard の統計表に1773—80年の部分をつけ加え，1716—80年の輸出入地域別構成表とした.

（8） この3点を指摘しているものに，J.-B. Manger, *Recherches sur les relations économiques entre la France et la Hollande pendant la Révolution française*, 1923, pp. 21—22 がある。

（9） この点については，Cf. Morineau, op. cit., p. 183.

(10) ラブルースは，貿易統計の数量に関する評価は，価額の評価に比べてはるかに正確であり，「19世紀後半の通関統計にも匹敵する価値がある」(E. Labrousse, *La crise de l'économie française à la fin de l'Ancien Régime et au début de la Révolution*, Paris, 1943, p. 112) と述べており，多くの研究者はこの見解に従っている。Cf. Romano, op. cit., p. 1271; Dardel, *Navires et marchandises*, p. 20; Morineau, op. cit., pp. 182—183; Tarrade, *op. cit.*, t. II, p. 723.

(11) ただし，絶対値としてはつねに過小評価に陥っているとしても，その誤差は異なる年度についてほぼ一定と考えられ，したがって，貿易統計の数字は，輸出入の規模や構造の時間的な変動 mouvement を解明するための資料としては信頼するにたりるのである。Cf. Labrousse, *La crise de l'économie*, p. 112; Dardel, *Navires et marchandises*, p. 20; Crouzet, Pijassou et Poussou, op. cit., p. 192.

(12) アランによれば，アルザス・ロレーヌとフランスの他の諸州との間の商取引は，貿易統計上はドイツとの貿易の中に含められているという。Harang, *op. cit.*, pp. 15—16. もし，そうであるならば，対ドイツ貿易の数字は過大評価の誤りを含むことになろう。しかし，1787—88年のドイツからの輸入品の中には，アルザスから大量にもちこまれたはずの捺染織物がほとんど見出されないことからみて，アランの見解には直ちに賛同しがたい。アルザス産捺染織物のフランスへの「輸入」については，拙著『フランス産業革命論』(未来社，1968年)，280—281頁参照。

(13) Cf. Romano, op. cit., p. 1271; Harang, *op. cit.*, p. 19; Tarrade, *op. cit.*, t. II, p. 723; Morineau, op. cit., p. 188; Dardel, *Navires et marchandises*, p. 21. 価額評価に対して最もきびしい批判を加えているのはタラードである。彼によれば，商業会議所は価格について正確な指示を与えようとつとめておらず，関税納入のさいの査定額の決定のことを考えて，実際よりも低い価格を与える傾向がある。また，同一の商品に異なる品質のものがある場合，それらの価格の単純な平均値をもってその商品の価格とみなしたり，同一の価格を2年以上にわたって適用したりしており，したがって「価額でのデータはつねにかなり疑わしい」(Tarrade, *op. cit.*, t. II, p. 725) とされる。

(14) この貿易統計が，その本来の作成目的であるフランスの国際収支の考察にほとんど役立ちえないことは，ネッケル，デュポン=ド=ヌムールら同時代の経済学者がつとに指摘するところであった。Harang, *op. cit.*, pp. 15—18; Morineau, op. cit., pp. 181, 188.

(15) 輸出入商品の価額評価が近似的なものにとどまるとすれば，たとえば輸出入の商品別構成に現われた百分比の微小な変化になんらかの意味を認めることはできないであろう。Morineau, op. cit., p. 188.

(16) Ibid., pp. 183—184.

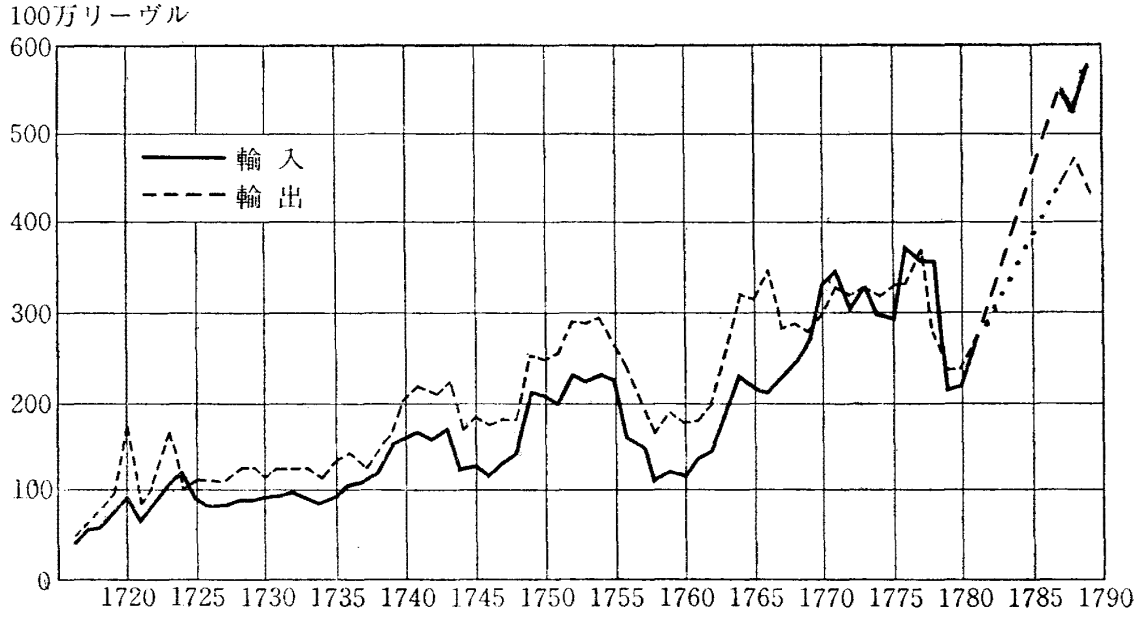
(17) 以下で分析する統計資料は，筆者が1976年7月から半年間フランスに留学したさい，パリの国立文書館およびルアン，サン=ブリューの各市立図書館において蒐集したものである。なお，帰国後，一部に蒐集もれがあることに気づき，当時フランスに滞在中であった大阪大学の堀井敏夫氏にお願いして，その部分を原史料より筆写して頂いた。

Ⅲ　貿易の成長とそのリズム

18世紀にフランスの対外貿易がめざましい拡大発展をとげたことは，既に多数の研究によって確認されている。レオンによれば[(1)]，フランスの貿易総額は18世紀初頭から大革命前夜にいたる間に，名目額でおよそ5倍から5.5倍に，物価上昇分をデフレートして実質でみても約3倍に，増加したと評価されるが，これは同じ時期のイギリス対外貿易の成長率を確実に上まわるものであった。だが，ここで注意したいのは，英仏両国の貿易の成長率が前述のように18世紀の前半と後半とで著しい差異を示すとされていることである。再びレオンによれば[(2)]，フランスの貿易の成長率は18世紀前半においてとりわけ高く，世紀の後半には目立って低下しているのに対して，イギリスの貿易の成長率は1700—45年には年平均0.5%という低率に留まっていたが，1745—71年には年平均2.8%に上昇し，ついで1779—1802年には年平均4.2%という高率に達したという。しかし，レオンは，フランスについては総輸出と植民地からの輸入とに関する簡単な数字をあげるにとどまっているので[(3)]，以下彼も利用している貿易差額事務局の統計にもとづいて，フランスの総輸入と総輸出の成長のリズムをいま少しくわしく検討してみよう。

まず輸入の動きをみると，下の図[(4)]が示すように，その総額は1716年から24年

フランスの輸出入総額の変動



にかけてめざましく増加した後，1735年頃まで完全に頭うちとなっている。しかし輸入総額は，1736年から再び急速に増加しはじめ，オーストリア継承戦争(1740—48年)による停滞と収縮をはさんで1752—54年まで，着実に増加をつづけている。この躍進は七年戦争（1756—63年）によって中断されるが，戦後63年から早くも回復過程に入り，68年に輸入総額は七年戦争前の水準を突破し，その後も71年まで急上昇をつづけて行く。しかし，1772—75年には著しい収縮が生じ，76—78年の短い上昇の後，アメリカ独立戦争のために激しい落ち込みを経験することになる。その後1782—86年については資料が欠如しているが，87—89年[5]には輸入総額は70年代のピーク時をはるかにしのぐ高水準に達しており，80年代に輸入の加速的成長が起ったことは確実である。

表1　輸出入の年平均成長率

時　期　別	輸　入	輸　出
1716/20～1736/40	3.5%	2.7%
1716/20～1749/55	3.6%	3.2%
1716/20～1787/89	3.1%	2.3%
1736/40～1749/55	3.8%	3.8%
1749/55～1771/77	1.9%	1.1%
1749/55～1787/89	2.6%	1.5%
1771/77～1787/89	3.8%	2.1%

つぎに輸出の動きをみると，それは輸入の動きと基本的に一致しており，1716—20年，1737—41年，1749—54年，1762—66年，1780年代という高成長期と，1724—37年，1766—76年という停滞期とを見わけることができる。ただ輸出の場合には，七年戦争後の回復と上昇が輸入に比べて一層めざましかった反面，輸入の場合よりも早期に終りをつげていること，また1780年代における成長が輸入に比べてより小規模にとどまったとみられること，の2点を相違点として指摘しておかねばならない。

ここで，18世紀のさまざまの時期において輸入総額と輸出総額の成長率がどのようであったかをまとめて示すならば，表1[6]の通りである。この表から次の5点を確認しておくことにしたい。

(1)　1716—20年から1787—89年までの約70年間の年平均成長率は，輸入の3.1%に対して輸出は2.3%であり，18世紀には全体として輸入の方が輸出よりもより急速に成長をとげている。

(2)　1716—20年から1749—55年までの年平均成長率は輸入が3.6%，輸出が3.2%であるのに対して，1749—55年から1787—89年までの年平均成長率は輸入が2.6%，輸出が1.5%である。フランスの貿易の成長率は18世紀の前半の方がその後半よりも高いという，前述のレオン，クルーゼらの説が確認される。

(3) 輸入，輸出をつうじて最も急速な成長がみられたのは，1736—40年から1749—55年にいたる時期である。とくに輸出の場合，この時期の年平均成長率3.8%は他の時期に比べて格段に高い。まさしくクルーゼのいうように，この時期は「フランス対外貿易の黄金時代」[(7)]であった。

(4) 貿易の成長率が最も低下するのは，1749—55年から1771—77年にいたる時期であり，とくに輸出の伸びが年平均1.1%ときわめて緩慢になっている。

(5) 1771—77年から1787—89年にいたる時期にはその直前の時期に比べて輸入，輸出ともに成長率の著しい上昇が認められる。とくに輸入の年平均成長率3.8%は，1736—40年から1749—55年にいたる時期の年成長率にひとしく，したがって輸入については世紀の後半に成長が緩慢化するとは必ずしもいえない。

以上，18世紀初頭から大革命までのフランスの総輸入および総輸出の名目成長率を全体として，また時期別に測定したのであるが，しかし，このような貿易の成長速度はフランス対外貿易を構成するさまざまのセクターによってもとより一様ではなかった。つぎに総輸入および総輸出の地理的分布の変化を検討することによって，その点を明らかにすることにしよう。

(1) Léon, L'élan industriel, p. 503; do., *Économies et sociétés préindustrielles*, t. II: *1650—1780*, Paris, 1970, p. 172.

(2) *Ibid.*, pp. 174—175.

(3) レオンによれば，フランスの総輸出の年成長率は1716—48年の4.1%から1749—78年には1%に低下し，その後も1.4%にとどまっている。また，植民地からの輸入の増加率も同様に年平均5.7%から3.7%，ついで2.1%へと低下した。Léon, L'élan industriel, pp. 503, 505.

(4) この図は，1716—80年についてはロマーノが公刊した統計に，1781年については同年の地域別輸出入額一覧表（Bibl. Mun. de Rouen, Fonds Montbret 155—4）に，また1787—89年については各年度の輸出入商品一覧表（Arch. Nat., F^{12} 251）に，それぞれもとづいて作成されている。ただし，ロマーノの数字については Bruyard の原表と対照することによって誤りを訂正した。また Bruyard の原表には，1750—56年の植民地向け輸出額と1771年の輸入総額に誤りがあるが，これについては本稿第Ⅳ節の注(1)で述べるような訂正を加えた。

(5) この図および表1における1787—89年の輸入総額，輸出総額はいずれも金銀・貨幣をのぞいた数字である。これは，この3年間の金銀・貨幣の輸入額が，それ以前に比べてけた違いに大きくなっており，1781年以前については金銀・貨幣の輸出入額が貿易統計上きわめて不完全にしか記録されていない可能性が強いからである（金銀・貨幣の輸入額，1775—77年平均1,386,000リーヴル，1787—89年平均67,170,000リーヴル，同輸出額，1775—77年平均976,000リーヴル，1787—89年平均2,774,000リーヴル）。ロマーノは，「われわれが公刊したデータの中には貴金属および貨幣の輸出入は含まれていない」（op. cit., p. 1271）と述べているが，少なくとも1750年代および70年代の貿易統計には「ピアストル銀貨」，「地金銀」，「ゼッキー金貨」といった項目が現われるのであって，ロマーノのようにはいえないと思う。それ故，1787—89年と

の比較のためには，1781年以前についても輸出入の総額より金銀・貨幣を除去する必要があるが，それは現在のところ不可能であるので，1716—81年については原表の数字をそのまま用いることにした。

（6） 前掲の図と同じく，本節の注(4)にあげた資料にもとづいて作成した。

（7） Crouzet, Angleterre et France, p. 264.

Ⅳ 輸出入の地域別構成の変化

本節では，18世紀におけるフランスの貿易発展の特質をより具体的に把握するために，この時期にフランスの貿易相手地域の構成がどのように変化したかを検討することにする。表2，3[1]は，前述の貿易差額事務局の統計にもとづいて，18世紀初頭から大革命にいたるまでのフランスの輸入総額および輸出総額の地域別構成を総括的に示したものである。この両表の左方には，それぞれ輸入と輸出に占めるヨーロッパ地域と非ヨーロッパ地域（レヴァント[2]を含む）の割合が示されているが，これによってまず，フランスの対外貿易に占めるヨーロッパ市場の比重が，18世紀のうちにかなり顕著に低下したことを知ることができる。即ち，まず輸入面では，1721—25年に総額の4分の3近くに達したヨーロッパの比重は，1764—70年には総額の2分の1を下まわるようになり，その後もアメリカ独立戦争期をのぞいて40％台にとどまっている。これに対して，輸入に占める非ヨーロッパ地域の比重は，1721—25年の4分の1強から1764—77年および1787—89年の2分の1強へと，約2倍に増大したのである。一方，輸出面では，ヨーロッパの比重は18世紀をつうじて70％を超えており，輸入の場合とは異なってヨーロッパ市場がつねに圧倒的な比重を占めていた。しかし，1716—20年には総輸出の実に87％がヨーロッパ地域に集中していたのに対して，1731—35年から1771—77年にかけてはヨーロッパへの集中率は77—79％に，さらに1787—89年には75％にまで，低下している。これに対して，輸出に占める非ヨーロッパ地域の割合は，1716—20年の13％から1787—89年の25％へと，約2倍に増大しているのである。

以上のように，18世紀にフランス対外貿易の地域別構成に生じた第一の重要な変化は，輸出入，わけても輸入に占めるヨーロッパ市場の比重の低下と，非ヨーロッパ市場の比重の増大であるが，つぎにヨーロッパと非ヨーロッパとのそれぞれの内部で，輸出入の国別ないし地域別の構成がどのように変化した

表2　輸入の地域別構成

時期別	総額	ヨーロッパ	非ヨーロッパ	スペイン	ポルトガル	イタリア	オランダ	ハンザ諸都市	スウェーデン	デンマーク	ロシア	イギリス	ドイツ	スイス	レヴァント	アメリカ合衆国	アメリカ植民地	西アフリカ	東インド
	千リーヴル	%	%	%	%	%	%	%	%		%	%	%	%	%	%	%	%	%
1716—20	64,289	68.5	31.5	13.8	0.5	16.0	17.1	4.2				9.9	6.7	0.3	7.1		20.6	0.07	3.6
1721—25	93,318	74.2	25.8	13.1	1.5	14.9	17.5	6.0				11.3	9.5	0.4	6.1		19.1	—	—
1726—30	84,836	71.8	28.2	15.8	0.9	14.1	15.0	5.1				10.5	10.0	0.4	6.2		21.5	0.6	—
1731—35	89,432	71.8	28.2	15.1	0.9	13.3	14.4	4.3	1.0			11.2	8.7	2.9	5.4		22.8	—	—
1736—40	128,066	64.6	35.4	16.3	0.6	11.2	11.7	3.1	1.5			9.1	7.2	3.9	7.9		27.6	—	—
1741—48	138,429	63.6	36.4	15.4	0.9	11.3	13.8	3.6	1.5		0.03	5.7	5.9	5.5	11.0		25.4	—	—
1749—55	215,513	56.9	43.1	11.2	0.6	13.1	9.8	4.9	1.4		0.5	6.7	4.7	4.0	12.9		30.3	—	—
1756—63	138,544	75.8	24.2	16.8	1.3	20.9	14.6	3.0	1.8		0.5	3.8	8.8	4.3	12.9		11.2	—	—
1764—70	243,658	49.1	50.9	9.3	0.9	13.9	8.4	3.8	1.7		0.6	3.8	5.3	1.4	12.5		38.5	—	—
1771—77	327,245	45.4	54.6	9.3	1.1	10.0	7.6	3.0	1.8		1.2	4.2	5.6	1.6	9.3		39.2	—	6.2
1778—81	261,290	61.3	38.7	8.9	2.1	19.0	7.7	3.4	3.3		0.9	0.8	12.2	3.0	8.6	1.0	28.9	—	0.2
1787—89	549,204	48.2	51.8	5.5	1.6	10.9	5.2	2.4	2.0		1.2	10.3	7.9	1.2	7.3	1.9	42.6		

総額は年平均額を示す。

かをみよう。まずヨーロッパ諸国のうち18世紀にフランスの輸入相手地域として重要であったのは，スペイン，オランダ，イタリア[3]，イギリス，ドイツ（オーストリア領フランドルを含む[4]）の五つであった。これら諸国の比重は，表2が示すように，戦争の時期をのぞけば，いずれも18世紀の前半から後半へと進むにつれて低下して行く傾向にあり，その結果として前述のような総輸入に占めるヨーロッパの比重の全体としての低下が生じているのであるが，よりくわしくみると，フランスの輸入先としてのこれら諸国の意義は時期によってかなり異なっていることがわかる。即ち，1716—25年にはオランダが第1位を占め，以下イタリア，スペイン，イギリス，ドイツの順であったが，1726—40年になると，スペインがオランダ，イタリアを抜いて第1位に躍進する。しかし，これにつづく1749—55年にはスペインとオランダが急激に比重を低下させて2，3位に後退し，代ってイタリアが首

表3　輸出の地域別構成

時期別	総額	ヨーロッパ	非ヨーロッパ	スペイン	ポルトガル	イタリア	オランダ	ハンザ諸都市	スウェーデン	デンマーク	ロシア	イギリス	ドイツ	スイス	レヴァント	アメリカ合衆国	アメリカ植民地	西アフリカ	東インド
	千リーヴル	%	%	%	%	%	%	%	%		%	%	%	%	%	%	%	%	%
1716—20	90,845	87.2	12.8	21.3	1.1	18.1	21.8	4.1				6.1	9.7	5.0	3.9		7.8	—	1.2
1721—25	115,200	83.2	16.8	21.7	2.4	7.6	21.1	5.5				7.7	13.6	3.6	4.5		12.4	—	—
1726—30	116,672	79.7	20.3	23.7	3.6	7.8	15.7	4.8				5.1	16.9	2.1	7.6		11.8	0.9	—
1731—35	126,603	78.4	21.6	23.3	3.1	6.6	14.9	6.3	0.6			4.7	15.2	3.7	10.4		10.0	1.1	—
1736—40	155,895	77.6	22.4	19.5	2.6	10.0	12.7	7.5	1.2			5.0	15.5	3.6	9.3		12.0	1.1	—
1741—48	190,072	77.4	22.6	15.4	2.6	13.5	13.9	8.8	1.4		0.1	2.8	15.3	3.6	10.2		11.5	0.8	—
1749—55	263,270	76.6	23.4	19.4	2.0	13.5	11.0	11.1	1.6		0.3	3.8	12.0	1.9	10.2		11.7	1.6	—
1756—63	197,678	84.0	16.0	23.3	2.7	12.5	10.5	5.7	1.6		0.3	0.9	23.1	3.4	9.9		5.9	0.3	—
1764—70	303,221	79.1	20.9	14.8	1.7	15.2	9.5	13.2	2.4		0.6	3.9	14.8	3.0	9.8		9.4	1.7	—
1771—77	333,560	77.0	23.0	13.5	1.4	12.8	11.2	12.3	3.0		2.1	3.2	14.3	3.2	8.0		10.0	3.3	1.6
1778—81	253,225	75.6	24.4	12.7	1.8	10.7	8.8	10.2	3.1		0.9	1.9	21.6	3.9	5.9	1.7	15.8	0.4	0.6
1787—89	448,191	74.6	25.4	9.7	0.8	10.4	9.2	13.9	2.3		1.5	7.4	14.7	4.7	4.4	0.3	20.7		

総額は年平均額を示す。

位に躍り出る。このイタリア，スペイン，オランダという序列は1764—77年にも変わらないが，1787—89年になるとスペイン，[5] オランダの比重が再び大きく低下して両国はもはや4，5位を占めるにすぎなくなる。そして，1786年の英仏通商条約の結果フランス向け輸出を急増させたイギリス[6]がイタリア[7]にすぐつづいて第2位を，またドイツが第3位を占めるようになる。

これに対して，ヨーロッパ諸国のうちフランスの輸出相手地域として重要であったのは，スペイン，オランダ，イタリア，ドイツ，ハンザ諸都市[8]の五つであった。これら諸国の比重の変動をみると，1716—25年にはスペインとオランダが第1位を争い，イタリアとドイツがこれにつづいていたが，1726—40年にはスペインが他を引きはなして断然首位を占め，ドイツがこれにつづき，オランダは大きく比重を低下させて第3位に後退するにいたった。スペインは1749—55年にも首位を保っているものの，1726—35年に

比べてその比重を明白に低下させており，1764—77年になるとイタリア，ドイツとほぼ同じレヴェルにまで後退する。一方，1731—35年以来着実に比重を増大させてきたハンザ諸都市が，1764—77年にはオランダを抜き，スペイン，イタリア，ドイツについで第4位を占めるようになる。さらに1787—89年になると，ドイツが首位，ハンザ諸都市が第2位を占めるようになり，スペインはイタリアに遅れて第4位に，オランダは第5位に転落する。なおこの時期には以上の諸国につづいてイギリスが，フランスの輸出先としても，にわかに比重を増大させたことが注目される。

以上に述べたように，18世紀のうちにフランス対外貿易の地域別構成に生じた第二の重要な変化は，スペイン，オランダ両国の比重の大幅な低下であり，両国の割合は輸入の場合1726—30年の最高31％から1787—89年の11％に，輸出の場合には1716—20年の最高43％から1787—89年の19％に，低下するにいたったのである。つぎに，非ヨーロッパ地域に目を向けるならば，それはレヴァント（北アフリカを含む）とフランス領植民地（アメリカ[9]，西アフリカ，東インド[10]）からなり，これに独立後のアメリカ合衆国が加わる。これらのうちフランスの輸入先として最も重要であったのはフランス領植民地であり，なかでも西インドを主体とするアメリカ植民地の比重は，1716—25年の20％前後から1749—55年には30％強に，ついで1764—77年には40％近くにというように，めざましい増加を示した。これに西アフリカ[11]と東インド[12]とを加えて植民地全体としてみるならば，総輸入に占めるその割合は1716—25年の20—25％程度から1771—77年および1787—88年には43—45％にと，同様に著しい増加を示している。これらのフランス領植民地に比べてレヴァント地域はフランスの総輸入に占める割合がはるかに小さいが，しかし1736—40年から1749—55年にかけてはその比重を著しく増大させており，この間における非ヨーロッパ地域の比重増大に対してアメリカ植民地に劣らぬ貢献をなしている。しかし，レヴァントの比重は1771—77年以後急低下しており，この時期における非ヨーロッパ地域の比重増大はもっぱら植民地からの輸入の急増によってもたらされたのであった。

つぎに，フランスの輸出先としての重要性をみると，この場合にもフランス領植民地がレヴァントよりも多かれ少なかれ大きな割合を占めているが，しかし両者の開きは輸入の場合ほど大きくはない。総輸出に占める植民地とレヴァントの比重は，ともに18世紀の比較的早い時期に急上昇をとげた後，1764—70

表4　植民地向け輸出の地域別構成　（単位　千リーヴル）

時期別	アメリカ植民地	西アフリカ	東インド
	%	%	%
1769—71年	27,806(9.2)	5,402(1.8)	1,452(0.5)
1772—74年	30,427(9.4)	11,312(3.5)	6,236(1.8)
1775—77年	38,033(11.1)	12,352(3.6)	7,134(1.5)
1778—81年	40,111(15.8)	978(0.4)	1,500(0.6)
1788年	76,617(16.4)	16,456(3.5)	7,134(1.5)

数字は年平均額。
（　）内は各時期の輸出総額に対する各地域の構成比（%）を示す。

年まで植民地は11—13%[13]，レヴァントは10%前後という安定した数字を示しており，ようやく1771—77年以後，植民地の比重の急上昇とレヴァントの比重の急低下によって両者の間に大きな格差が生じている。この植民地の比重の急上昇は，表4[14]が示すように，1770年代前半にまず西アフリカおよび東インド向け輸出の急増によって起り，ついで70年代後半から80年代にかけてアメリカ植民地向け輸出の急増によって加速化されたのである。

さて，18世紀におけるフランス対外貿易の発展がなによりも植民地貿易のめざましい拡大によって特徴づけられるということは，これまで数多くの研究によって指摘されてきたが，筆者は以上の検討結果にもとづいて次の2点を確認しておくことにしたい。即ち，フランスの総輸入に占める植民地の比重は1726—30年から1771—77年まで，戦争の時期をのぞきほぼ一貫して増大をとげたこと，これに対して総輸出に占める植民地の比重は1721—25年から1764—70年にかけてはほとんど増大を示さず，ようやく1770年代以降，とりわけ80年代にいたって急上昇をとげたこと，である。

以上，18世紀におけるフランス対外貿易の地域別構成の変化[15]について考察してきたが，最後に，このような貿易の地理的分布の変化が前節で述べた貿易の成長リズムの変化とどのように関連するかをみておこう。前掲表1によると，1716—20年から1736—40年にいたる時期にフランスの総輸入は年平均3.5%，総輸出は2.7%というかなりの速度で成長をとげたが，このような急成長を可能にしたものは，表2，3が示すように，スペインおよびアメリカ植民地からの輸入の急増と，ドイツ，ハンザ諸都市，レヴァント，アメリカ植民地に対する輸出の急増であった。ついで1736—40年から1749—55年にかけては輸入・輸出とも年平均3.8%という，18世紀を通じて最高の成長率が記録されたが，こ

の時期にはとくにレヴァント，イタリア，アメリカ植民地からの輸入と，スペイン，イタリア，ハンザ諸都市に対する輸出が，著しい伸びを示している。ついで1749—55年から1771—77年にかけては貿易の成長率は輸入・輸出とも18世紀の最低を記録するが，この時期にはとくにスペイン，オランダ，イタリア，レヴァントからの輸入の伸び悩みと，スペイン，レヴァント向け輸出の減退ないし頭うちが目立っている。最後に1771—77年から1787—89年には再び成長率の上昇がみられたが，これを可能にしたものは，アメリカ植民地，イギリス，ドイツからの輸入の急増と，アメリカ植民地，イギリス，ハンザ諸都市に対する輸出の著しい拡大であった。

以上2節にわたり，18世紀フランス対外貿易の成長リズムと地域別構成の変化とについて検討したが，次節ではこれらの考察を前提としつつ，本稿の主要課題である貿易の構造，即ち輸出入の商品別構成の分析を試みることにしたい。

（1） 表2，3とも前節の図および表1と同じ典拠にもとづいて作成した。ただし，植民地貿易に関するロマーノの数字には，彼が依拠した原統計自体に由来する誤りが含まれているので，次の2点について訂正を加えた。①Bruyardの総括表を原貿易統計（1750—51年については，Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Manuscrits 84, 1752—56年については Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155—1,2）と比較対照してみると，Bruyard が1750—56年のアメリカ植民地向け輸出額としてあげる数字は，実は各年度のアメリカ植民地向け輸出額に西アフリカ（ギニア）向け輸出額を加えた数値であることが判明する。それ故，Bruyard に依拠したロマーノの統計についても，1750—56年の各年度のアメリカ植民地向け輸出額から，さらに同じ年度のフランスの輸出総額からも，二重に計算されている西アフリカ向け輸出額を差引かねばならない。なお，タラードも18世紀フランス植民地貿易に関する研究において，Bruyard の総括表に依拠したために，ロマーノと同じ誤りを犯している。即ち，彼が1750—56年のアメリカ植民地向け輸出額としてあげる数字（Tarrade, *op. cit.*, t. II, p. 739）は西アフリカ向け輸出額を含むが故に若干過大評価になっている。筆者自身も旧稿「十八世紀後半におけるフランスの植民地貿易」（『西洋史学』97号，1975年），22頁において同じ誤りを再生産することになったが，同所に記した1749—55年のアメリカ植民地向け年平均輸出額3,444万リーヴルは，3,087万リーヴルと訂正せねばならない。② Bruyard の総括表によると，1771年のアメリカ植民地からの輸入額は215,012,919リーヴルとなっているが，この数字は前後の年に比べて異常に大きく，誤りの可能性が強い。タラードは，原統計の作成過程でボルドー総管区諸港からのコーヒー輸入量に関する数字の写し誤りがあったものと推定し，この年のアメリカ植民地からの輸入額として140,012,919リーヴルという数字を提出しており（*Ibid.*, p. 740），筆者もこれを採用することにしたい。なお，これに伴い1771年のフランスの輸入総額も344,123,290リーヴルと訂正される。

（2） ここではレヴァントという名称の下に，オスマン＝トルコ支配下の地中海東部沿岸地方と北アフリカのバルバリア諸国とを含めている。この地域は貿易地域分析においてしばしばヨーロッパに分類されているが，ここではロマーノに従って非ヨーロッパ地域に入れることにした。

（3） 貿易統計上イタリアとの輸出入額は，1716—58年には《Savoye et Piémont》と《Italie》との2つの項目の下に，1759—81年には《Savoye et Piémont》，《Italie》，《Naples》，《Gênes》，《Venise》の各項目の下に，1787—89年には《Sardaigne》，《Gênes》，《Milanès et Toscane》，《Naples》，《Venise》，《Rome》の各項目の下に，記録されている。

（4） ドイツとの輸出入額は，1716—81年には《Allemagne》と《Flandre autrichienne》とに2分されていたが，1787—89年には《Prusse》，《Allemagne》，《Autriche》の3つ，または《Prusse》，《Allemagne et Flandre》，《Allemagne et Pologne》の3つに分けて記録されている。

（5） スペインからは1787—89年に年平均5,514万リーヴルに上る金銀・貨幣が輸入されており，これを含めて計算すれば総輸入にしめるスペインの割合は1787—89年にも13.8%に達する。ただし，貿易統計に付せられた所見によれば，スペインからフランスへもちこまれた貴金属のうち，スペインの対フランス貿易の赤字の決済にあてられるのは一部分にすぎず，大部分はスペインに対して貿易黒字をもつ他の諸国へと送り出されたという。Cf. Arch. Nat., F^{12} 1835, Pièce 89. Résultat de la Balance en argent du commerce connu entre la France et chaque puissance étrangère pendant l'année 1788. Observations.

（6） 英仏通商条約（イーデン条約またはヴェルジェンヌ条約）は1786年9月26日に調印され，翌87年5月1日に発効をみた。この条約は17世紀末以来英仏両国の間に存在していた輸入禁止制と禁止的高率関税を原則として撤廃し，両国間の通商を自由貿易原理の上に移行させるものであった。この条約については，Cf. F. Dumas, *Étude sur le traité de commerce de 1786 entre la France et l'Angleterre*, Toulouse, 1904, pp. 63—115; W.O. Henderson, The Anglo-French Commercial Treaty of 1786, *Econ. Hist. Rev.*, 2nd Series, Vol. X, 1957, pp. 104—110; 松尾太郎『近代イギリス国際経済政策史研究』（法政大学出版局，1973年），121—147頁。

（7） ただし，1787—89年になると，イタリアはフランスの輸入先としてなお第1位を占めるものの，その比重は絶対的には1764—70年に比べてかなり低下しており，第2位のイギリスとの差はごくわずかである。

（8） 貿易統計上，ハンザ諸都市《Villes anséatiques》という項目が現われるのは1787—89年のことであり，それ以前には《Nord》（北部地方）という名称で示されている。この《Nord》の中には初期にはスウェーデン，デンマーク，ロシアも含まれていたが，これら3国は1743年までにそれぞれ独立の項目となり，《Nord》といえばハンザ諸都市を意味するようになった。Harang, *op. cit.*, p. 34. なお，ハンザ諸都市のうち，フランスの貿易先として重要であったのは，ハンブルク，ブレーメン，シュテッティンなどであり，なかでもハンブルクの比重がとび抜けて大きかった。

（9） アメリカのフランス領植民地は，七年戦争まではフランス領西インド，カナダ，ルイジアナ，ニューファンドランド沖の漁業基地，ギアナからなっていたが，1763年のパリ条約によってカナダとルイジアナがイギリスの手に渡った。ニューファンドランドおよびギアナとの貿易額はごく小さかったから，1763年以後についてはアメリカ植民地貿易イコール西インド貿易とみなしても，ほとんど誤りではない。

（10） 「東インド」にはインド，中国のほか，インド洋上のフランス，ブルボン両島が含まれている。このうち中国，即ち広東との貿易はいうまでもなく植民地貿易ではない。しかし，東インド貿易の中で中国貿易がしめる割合は小さく，また統計的にも中国貿易を分離することが困難なので，ここでは東インド貿易全体を植民地貿易として扱うことにする。

（11） 西アフリカ（ギニア）からフランスへの輸入額は，一部の年をのぞいて統計上アメリカ植民地からの輸入額の中に含められているが，きわめて少額にとどまったようである。Arch. Nat.,

F^{12} 1835 および Arch. Nat., Colonies, F^{2B} 13 の植民地貿易統計によると，1788年における西アフリカからの輸入額は1,701,036リーヴルであり，この年の輸入総額の0.3%にすぎない。

(12) 東インド貿易は，それが特権貿易会社たる「インド会社」Compagnie des Indes の独占下におかれていた1722—68年の間は，貿易差額事務局によって直接記録されるところとはならず，したがって表2，3に現われない。しかし，この貿易に関しては，1783年に刊行された l'abbé N. Baudeau, *Encyclopédie Méthodique, Commerce* の第2巻に，1725—26商業年（護衛商船団の出発と帰着により区分）から1770—71商業年までの連年統計が存在する。これによると，東インド向け輸出（貨幣をのぞく）は18世紀をつうじて総輸出の1—2%にとどまっていたとみられるが，東インドからの輸入額は1720年代後半から1750年代前半にかけては総輸入の10%前後に，また1760年代後半にも6—7%程度に達したものと推定される。Cf. Romano, op. cit., Appendice N. 3. それ故，フランスの総輸入に占める植民地および非ヨーロッパ地域の比重は，1720—70年頃については表2の数字からうかがわれるよりも若干大きかったと考えるべきであろう。

(13) この数字には東インド向け輸出は含まれていない。これを加えると，この期間の植民地向け輸出の比重は12—15%になろう。

(14) 1769—77年についてはロマーノの統計に，1788年については同年の地域別輸出入商品一覧表（Arch. Nat., F^{12} 1835 et Col., F^{2B} 12, 13）に，それぞれ依拠した。

(15) 筆者は上述のようなフランス貿易の地域別構成の変化を重視するものであるが，これに対してレオンは，貿易の「地理的分布も（その商品別構成と）同様にほとんど変化しない」とみている。Léon, L'élan industriel, p. 509. レオンは，貿易相手地域を「北方諸国」（ドイツ，オランダ，イギリス，スカンディナヴィア，ロシア），「南方諸国」（スペイン，ポルトガル，イタリア，レヴァント），「植民地」の3つに区分し，「貿易は1775年においても1726年と同様，3つのセクターにほぼ均等に分割されている」という。しかし，彼のあげる数字が示しているように，「北方諸国」の比率は1726—75年の間に39.5%から35.9%へと若干低下し，また「南方諸国」の比率は34.7%から27.3%へと大きく低下しているのに対して，「植民地」の比率は25.6%から36.6%へと大きく上昇しているのである。

V 輸出入の商品別構成の変化

18世紀フランスの輸出入の商品別構成について，貿易差額事務局の統計が網羅的な，もしくはそれに近いデータを提供するのは，1750年，1754—61年，1772年，1775—80年，1787—89年，の各年度に限られている。みられるように，ここには18世紀の初期に関するデータが欠如しているが，これについては後にアルヌーの資料で補うことにして，まず18世紀の中葉から大革命の直前にいたる輸入の商品別構成の変化からみて行くことにしよう。

表5[(1)]は，1755年，1776年，1788年の各年度におけるフランスの輸入総額の商品別構成を総括的に示したものである。ここに取り上げた三つの年度の数字は，それぞれ，七年戦争前，アメリカ独立戦争前，フランス革命前におけるフ

表5　輸入の商品別構成　（単位 千リーヴル）

品目別	1755年		1776年		1788年	
		%		%		%
原料	112,641	(50.05)	123,712	(33.45)	190,381	(34.26)
繊維原料	56,474	(25.09)	55,486	(15.00)	95,239	(17.14)
綿	10,975	(4.88)	18,489	(5.00)	40,400	(7.27)
羊毛	20,498	(9.11)	18,090	(4.89)	17,399	(3.13)
絹	19,650	(8.73)	12,244	(3.31)	23,179	(4.17)
麻	2,473	(1.10)	4,857	(1.31)	9,274	(1.67)
糸	2,802	(1.24)	1,796	(0.49)	3,618	(0.66)
金属	7,545	(3.35)	15,560	(4.21)	21,748	(3.91)
鉄と鋼	3,028	(1.35)	9,918	(2.68)	8,565	(1.54)
銅	1,914	(0.85)	2,951	(0.80)	9,255	(1.67)
鉛	1,784	(0.79)	2,090	(0.57)	2,361	(0.42)
錫	521	(0.23)	581	(0.16)	1,252	(0.23)
石炭	1,374	(0.61)	2,481	(0.67)	6,715	(1.21)
木材	5,854	(2.60)	7,261	(1.96)	10,023	(1.80)
皮革	6,881	(3.06)	3,725	(1.01)	6,236	(1.12)
羽毛	243	(0.11)	278	(0.07)	357	(0.06)
獣脂	719	(0.32)	1,087	(0.29)	4,612	(0.83)
ワックス	4,005	(1.78)	2,224	(0.60)	1,483	(0.27)
油	1,103	(0.49)	1,622	(0.44)	1,801	(0.32)
タール	817	(0.36)	876	(0.24)	601	(0.11)
ソーダ，カリ	2,116	(0.94)	4,035	(1.09)	5,464	(0.98)
染料・薬品	20,530	(9.12)	21,983	(5.94)	27,890	(5.02)
インジゴ	11,968	(5.32)	9,343	(2.53)	15,128	(2.73)
コチニール	2,178	(0.97)	6,332	(1.71)	2,125	(0.38)
アナット	81	(0.04)	366	(0.10)	226	(0.04)
茜	765	(0.34)	451	(0.12)	587	(0.10)
マンナ	431	(0.19)	924	(0.25)	693	(0.12)
没食子	1,027	(0.46)	104	(0.03)	246	(0.04)
明ばん	306	(0.14)	484	(0.13)	1,115	(0.20)
ゴム	411	(0.18)	377	(0.10)	1,870	(0.34)
その他の原料	4,980	(2.21)	7,094	(1.92)	8,212	(1.48)
食料	83,734	(37.21)	190,502	(51.51)	273,592	(49.23)
砂糖	35,540	(15.80)	79,449	(21.48)	90,171	(16.23)
コーヒー	13,673	(6.08)	38,588	(10.43)	92,974	(16.73)
カカオ	994	(0.44)	1,457	(0.39)	3,035	(0.55)
タバコ	1,550	(0.69)	5,713	(1.54)	4,241	(0.76)
茶	26	(0.01)	3,404	(0.92)	4,006	(0.72)
胡椒	1,883	(0.84)	4,456	(1.20)	2,436	(0.44)
丁子	1,718	(0.76)	497	(0.13)	1,134	(0.20)
穀物	4,570	(2.03)	13,348	(3.61)	12,070	(2.17)
果実	747	(0.33)	2,127	(0.58)	2,299	(0.41)
食肉	1,117	(0.50)	1,585	(0.43)	6,409	(1.15)
家畜	345	(0.15)	1,182	(0.32)	4,413	(0.79)

	魚	3,642	(1.62)	6,700	(1.81)	2,740	(0.49)
	バター	2,072	(0.92)	1,627	(0.44)	2,843	(0.51)
	チーズ	2,109	(0.94)	2,843	(0.77)	4,147	(0.75)
	オリーヴ油	10,735	(4.77)	21,545	(5.83)	27,455	(4.94)
	ぶどう酒	374	(0.17)	1,356	(0.37)	961	(0.17)
	蒸溜酒	148	(0.07)	2,382	(0.64)	7,157	(1.29)
	その他の食料	2,491	(1.11)	2,243	(0.61)	5,101	(0.92)
製造品		27,062	(12.02)	53,366	(14.43)	89,359	(16.08)
	繊維製品	14,753	(6.56)	39,844	(10.78)	72,002	(12.96)
	毛織物	94	(0.04)	723	(0.20)	5,845	(1.05)
	絹織物	4,193	(1.86)	1,201	(0.32)	3,488	(0.63)
	綿=麻織物	8,187	(3.64)	17,593	(4.76)	44,958	(8.09)
	モスリン	14	(0.01)	19,237	(5.20)	9,049	(1.62)
	リボン	1,092	(0.49)	648	(0.18)	2,042	(0.37)
	ハンカチ	408	(0.18)	72	(0.02)	2,385	(0.43)
	小間物	1,609	(0.71)	1,907	(0.51)	2,205	(0.40)
	金物	710	(0.32)	1,174	(0.32)	4,222	(0.76)
	針金	1,683	(0.75)	1,738	(0.47)		
	武器	263	(0.12)	835	(0.23)	395	(0.07)
	加工皮革	292	(0.13)	420	(0.11)	829	(0.15)
	紙と書籍	445	(0.20)	901	(0.24)	878	(0.16)
	陶磁器	554	(0.25)	707	(0.19)	1,795	(0.32)
	ガラス製品	580	(0.26)	730	(0.20)	514	(0.09)
	宝貝	108	(0.05)	1,265	(0.34)	365	(0.07)
	その他の製造品	6,065	(2.69)	3,845	(1.04)	6,154	(1.11)
雑商品		1,615	(0.72)	2,226	(0.60)	2,359	(0.42)
輸入総額		225,052	(100.00)	369,806	(100.00)	555,690	(100.00)

（　）内は輸入総額に対する各商品の構成比（%）を示す。

ランス対外貿易の到達水準を示すものと考えてよい。まず輸入商品を原料，食料，製造品の三つに大別し，それぞれの占める割合[2]をみると，1755年には原料が輸入総額の50%を占め，食料は37%を占めるにとどまっているのに対して，1776年になると，原料の割合は大幅に低下して33%となり，代って食料の割合が52%にまで急上昇している。即ち，1755年から76年にいたる間に，原料の輸入がほとんど頭うちとなる一方，食料の輸入がめざましく増加したのであり，その結果，フランスの輸入の基軸は原料から食料へと明確に移動したのである。ついで1788年になると，76年に比べて食料の割合がいく分低下し，原料の割合がわずかに増大しているが，しかし食料が輸入の基軸をなすという構造そのものは変化していない。なお，以上の食料，原料に比べて輸入に占める製造品の割合ははるかに小さいが，1788年には55年に比べてかなりの増加を示して

いる。

つぎに，これらの食料，原料，製造品の内容をややくわしくみることにしよう。同じく表5によると，原料のうち最も重要なものは綿，羊毛，絹，麻という繊維類であり，1755，76，88のいずれの年度においても輸入原料全体の約2分の1を占めている。だが，この繊維原料が総輸入に占める比重は，1755年の25％から76年には15％へと大きく低下し，88年にはいく分回復したものの，なお17％にとどまっているのである。さらに，注意すべきは，繊維原料の中でも綿（綿花と綿糸[3]）の比重が一貫して上昇しているのに対して，羊毛と絹（主に生糸[4]）の比重がこの間に大幅に低下していることである。繊維原料についで重要なのは染料・薬品類であるが，総輸入に占めるその割合は，なによりもインジゴ輸入の伸び悩みのために，1755年の9％から88年には5％へと目立って低下している。これらの他，絶対額は小さいが皮革，木材などもこの間に多かれ少なかれ比重を減じているのに対して，鉄，銅などの金属[5]と石炭とは逆に比重を増大させているのが注目を引く。このように原料輸入の動向は品目によりけっして一様ではなかったが，総輸入に占める原料の比重が1755年から76年にいたる間に大きく低下したことの主たる原因が，羊毛・絹・インジゴ三商品の輸入の絶対的減少にあることは，表5の数字から容易に知られるところであろう。

さて，1755—88年における輸入食料の中では，砂糖，コーヒー，カカオ，タバコ，茶，胡椒，穀物，オリーヴ油，果実，魚類[6]，家畜[7]，食肉[8]，蒸溜酒（ブランデー）などが重要なものであった。これらのうち，この時期における食料輸入の急上昇に対して主要な役割を演じたものは，砂糖とコーヒーの輸入のめざましい増加である。表5が示すように，総輸入に占める砂糖の割合は1755年の16％から76年には21％に，またコーヒーの割合は6％から10％に，それぞれ上昇している。そして，砂糖の輸入がその後伸び悩みを示し，88年にはその割合が再び16％に低下するのに対して，コーヒーの輸入は急増をつづけて，88年には砂糖の割合をわずかながら上まわるにいたっている。この1776—88年における砂糖輸入の伸び悩みこそ，総輸入に占める食料の比重がこの間にいく分低下をみた最大の理由である。なお，1776年には55年に比べて，砂糖とコーヒーの他にもタバコ，茶，胡椒，穀物，オリーヴ油，果実，蒸溜酒，魚類など多数の商品がその比重を多少とも増大させていることを，つけ加えておこう。

最後に，輸入された製造品の内訳をみると，その主力は繊維製品であり，その中では，トワル toiles[(*)] と総称される麻織物=綿織物と，モスリンとが圧倒的な割合を占めている。表5によると，総輸入に占める繊維製品の割合は1755年の6.6%から76年の10.8%へと大幅に増加したことになるが，しかし1755年の数字には東インドからの輸入分が含まれていないので，この年の繊維製品の比重は著しく過小評価になっているとみられ[(10)]，したがって1755年から76年にいたる間に輸入に占める繊維製品の比重が現実に増大したとは速断できない。これに反して，1776年から88年にかけては繊維製品の比重は確実に増加をとげ，総輸入の13%に達した。繊維製品以外の製造品としては，小間物，金物，陶磁器などが比較的重要であるが，ほとんどの商品は輸入の絶対額が小さいだけでなく，総輸入に占めるその割合も1755年から88年にいたる間に増加していない。

ここで，この時期にフランスの輸入の商品別構成を変化させる上にとくに重要な役割を演じたとみられる五つの商品について，その輸入額の変動をより細かく追跡してみよう。表6[(11)]によると，繊維原料の主力をなす綿，羊毛，絹のうち綿の比重は，1766年には1754—55年に比べて著しく増加しており，羊毛の比重も66年には55年に比べれば低下しているものの，なお高い水準を保っている。絹の比重はこの間にかなりの低下を示しているが，全体として総輸入に占

表6　繊維原料，砂糖，コーヒーの輸入の推移　（単位　千リーヴル）

年	輸入総額	綿	羊　毛	絹	砂　糖	コーヒー
		%	%	%	%	%
1754	227,122	8,966 (3.9)	15,861 (7.0)	23,519(10.4)	36,895(16.2)	15,317(6.7)
1755	225,211	10,975 (4.9)	20,498 (9.1)	19,650 (8.7)	35,540(15.8)	13,673(6.1)
1766	207,344	13,885 (6.7)	15,968 (7.7)	16,428 (7.9)	34,540(16.7)	11,283(5.4)
1770	324,821	19,561 (6.0)	14,211 (4.4)	6,482 (1.9)	54,813(16.9)	58,702(18.1)
1771	344,123	13,460 (3.9)	12,442 (3.6)	6,063 (1.8)	53,054(15.4)	55,114(16.0)
1772	300,240	12,002 (4.0)	16,096 (5.4)	6,452 (2.2)	45,948(15.3)	42,691(14.2)
1773	330,984	12,492 (3.8)	21,614 (6.5)	13,017 (3.9)	52,518(15.9)	44,292(13.4)
1774	295,643	15,370 (5.2)	14,110 (4.8)	6,779 (2.3)	68,573(23.2)	34,301(11.6)
1775	293,069	13,293 (4.5)	14,948 (5.1)	7,069 (2.4)	46,787(16.0)	32,095(11.0)
1776	370,928	18,489 (5.0)	18,090 (4.9)	12,244 (3.3)	79,449(21.4)	38,588(10.4)
1777	355,731	18,593 (5.2)	23,381 (6.6)	8,975 (2.5)	108,100(30.4)	40,731(11.5)
1778	353,904	13,526 (3.8)	17,155 (4.8)	33,471 (9.5)	132,271(37.4)	26,335(7.4)
1782	420,972	21,004 (5.0)	28,037 (6.7)	25,708 (6.1)	59,735(14.2)	52,517(12.5)
1787	547,915	42,898 (7.8)	20,901 (3.8)	28,421 (5.2)	71,185(13.0)	76,652(14.0)
1788	555,690	40,400 (7.3)	17,399 (3.1)	23,179 (4.2)	90,171(16.2)	92,974(16.7)

（　）内は各年度の輸入総額に対する各商品の構成比（%）を示す。
1782年の数字は東インドからの輸入を含まず。

める繊維原料の割合は1766年には1754—55年と大差がなかったものと推定される。しかるに，1770年には羊毛の比重が，また71年には綿と羊毛の比重が，ともに大きく低下しており[12]，絹についてはその正確な輸入額を知りえないが[13]，総輸入に占める繊維原料の割合はこの時点ですでに1754—55年の水準を大幅に下まわるにいたったとみてよいであろう。これに対して，輸入食料の過半を占める砂糖とコーヒーの比重は1754—66年にはほとんど増加していないか，あるいはいく分減少してさえいるが，1770—71年にはコーヒーの比重がその価格騰貴[14]も大いに手伝って急上昇をみせ，砂糖の比重をしのぐようになっている。砂糖の比重自体は1770—71年においても1754—55年とほとんど変りがないが，しかし砂糖とコーヒーとを合わせると総輸入に占めるその割合は31—35％となり，前述の1776年における両者の比重（32％）にほぼ匹敵するか，あるいはこれを明確に上まわっている。このようにみると，筆者がさきに1755年と1776年との比較によって確認した，輸入に占める原料と食料の比重の逆転という事実は，1766年と70—71年との間に起った可能性が強いとみなければならないであろう。

つぎに1772—77年についてみると，この時期には綿と羊毛の比重は1771年に比べて多かれ少なかれ増加を示すものの，絹の比重はいぜんきわめて低い水準にあり，全体として繊維原料が総輸入に占める割合は1766年時の２分の１から３分の２程度にとどまったものと推定される。これに対して，食料の中ではコーヒーの割合が1770—71年に比べて著しく低下する一方，1754年以来総輸入の15—17％に安定していた砂糖の割合が，74年と76年とに総輸入の20％以上にまで上昇し，ついで77年にははじめて30％に達するにいたった。つぎの1778年はフランスの砂糖輸入がその数量，価額，さらに総輸入に占めるその比重の点で18世紀の最高を記録した年であるが[15]，同時にまた，総輸入に占める食料の比重が18世紀後半で最高に達した年でもあったであろう。砂糖の輸入はアメリカ独立戦争期に衰退したのち，1782年から再び増加に向うが，その絶対額は1788年においても1777—78年の水準をかなり下まわっている。これに反して，コーヒーの輸入額は1780年代に70年代の水準をはるかに超えて増加をつづけており，1787—88年には砂糖の輸入額をわずかながら上まわるようになっている[16]。ところで，この80年代には綿と絹の輸入が著しく増加し，とくに綿の輸入額と総輸入に占めるその割合とは1787年に18世紀のピークに達している[17]。しかし，絹の比重は1770—77年に比べれば増加したとはいえ，1754—55年の水準をはるかに

下まわっており，また羊毛の輸入もいぜん伸び悩みをつづけているために，全体としての繊維原料の比重は，1754—55年あるいは1766年のそれに遠く及ばなかったものと考えられる。

以上に述べたところから，フランスの輸入貿易は，ほぼ1766—71年を境として，それまでの繊維原料をはじめとする工業原料が最大部分を占めるような構造から，砂糖，コーヒーに代表される食料が最大部分を占めるような構造へと転換をとげた，とひとまずみることができよう。そしてこのような輸入構造の転換は，一方ではアメリカ（西インド）植民地の経済的発展，そこからの砂糖とコーヒーの輸入のめざましい増加[18]にもとづいていると同時に，他方では前述のような18世紀後半におけるフランス工業成長の緩慢化，工業原料に対する国内需要の伸び悩みを反映するものと考えることができよう。

以上，18世紀中葉から大革命直前にいたるフランスの総輸入の商品別構成の変化をあとづけたのであるが，つぎに以上の分析結果をアルヌーの統計資料から知られるところと突き合わせることによって，18世紀の初頭から中葉にいたる輸入構造の変化について一応の見通しを立てておくことにしよう。アルヌーの提供する数字によれば，1716年においてフランスの総輸入に占める各商品の割合は，表7[19]が示すように，原料31%，食料46%，製造品16%となっている。これを前掲表5に示した1755年の状態と比較すれば，1716年には原料の比重がはるかに低く，食料と製造品との比重がかなり高くなっていることがわかる。1755年の製造品輸入に関する数字は前述のように過小評価になっていることに留意しなければならないが，1716年から55年にいたる間にフランスの総輸入

表7　アルヌーの資料による輸出入の商品別構成

（単位　千リーヴル）

		1716年	1787年
輸入	原料	25,389 (31.3%)	219,227 (36.3%)
	食料	37,582 (46.3)	253,803 (42.0)
	(うち植民地物産)	(14,587) (18.0)	(153,831) (25.5)
	製造品	13,346 (16.4)	118,157 (19.6)
	(うち繊維製品)	(9,226) (11.4)	(95,623) (15.8)
	奴隷	1,543 (1.9)	4,884 (0.8)
	雑商品	3,351 (4.1)	7,873 (1.3)
	総計	81,211(100.0)	603,944(100.0)
輸出	原料	6,606 (5.7%)	41,343 (7.8%)
	食料	40,591 (34.9)	134,198 (25.5)
	製造品	42,733 (36.8)	180,441 (34.2)
	(うち繊維製品)	(34,520) (29.7)	(127,353) (24.2)
	植民地物産	17,816 (15.3)	156,369 (29.7)
	奴隷	—	559 (0.1)
	雑商品	8,419 (7.3)	14,438 (2.7)
	総計	116,165(100.0)	527,348(100.0)

金銀の輸出入を含まず。

に占める原料の比重が大幅に上昇し，食料の比重がかなり低下したことは，ほぼ確実に指摘しうるであろう。また，1716—55年の間における製造品の比重の低下は，もっぱら繊維製品の比重の低下として現われているが，その理由としては，前述の東インドからの輸入分の欠落に加えて，1716年にはなお相当量輸入されていたイギリス繊維製品が55年には完全に姿を消した[20]という事情を，あげることができよう。工業原料の比重の増大は18世紀前半におけるフランス工業生産の著しい成長を反映するものであり，とりわけ綿・羊毛・絹の各工業における原料需要の増大によるところが大きいと考えられる。実際，アルヌーによれば1716年には繊維原料と皮革，羽毛，油[21]が総輸入に占める割合は全部で15.5%にすぎなかったが，1755年には前述のように繊維原料のみで全体の25%を占めているのであり，この間における繊維原料輸入の比重の著しい上昇が確認される。また食料の比重は全体としては大きく低下したが，これはヨーロッパ諸国からの輸入が減少したためであって，砂糖，コーヒー，カカオという植民地産食料品が総輸入に占める割合は，1716年の18%から55年には22%に増大しているのである。

以上に考察したところから，18世紀初頭から大革命前夜までのフランスの輸入の商品別構成の変化について，およそつぎのように考えることができるのではなかろうか。フランスの輸入貿易は1716年には食料が最大部分を占めるような構造をとっていたが，その後原料，なかでも繊維原料の輸入が食料の輸入よりも急激に増加することによって，1754—55年までに原料が最大部分を占めるような構造へと転換をとげた。このような輸入構造は1766年にもなお存続していたとみられるが，1770—71年になると，食料，とりわけコーヒーの輸入の急増と，繊維原料の輸入の減退とによって，輸入貿易は食料が最大部分を占めるような構造へと再び転換をとげたようにみえる。このような輸入構造は1777—78年に食料輸入がそのピークに達した時，最も明確となる。その後1780年代には，食料の比重が70年代に比べていく分低下し，原料の比重が幾分上昇するが，しかし食料が最大部分を占めるという構造そのものは大革命まで基本的に変化していない[22]。18世紀を通じての輸入構造の変動をひとまずこのように把握した上で，つぎに輸出の商品別構成の検討に進むことにしよう。

表8[23]は，1755年，1776年，1788年の各年度におけるフランスの輸出総額の商品別構成を総括的に示したものである。これによると，1755年には製造品が総

表8　輸出の商品別構成　（単位 千リーヴル）

品目別	1755年		1776年		1788年	
		%		%		%
製造品	135,283	(52.54)	150,375	(45.78)	156,877	(33.68)
繊維製品	104,759	(40.68)	118,206	(35.98)	118,861	(25.52)
毛織物	30,308	(11.80)	20,437	(6.23)	23,683	(5.08)
絹織物	21,677	(8.42)	29,864	(9.09)	15,928	(3.42)
麻＝綿織物	33,692	(13.08)	46,253	(14.08)	49,928	(10.72)
モスリン	67	(0.03)	3,138	(0.96)	1,939	(0.42)
靴下・編物	2,641	(1.03)	3,657	(1.11)	5,853	(1.26)
帽子	3,662	(1.04)	3,403	(1.04)	3,190	(0.68)
レース	2,676	(1.42)	4,111	(1.25)	3,124	(0.67)
リボン	2,789	(1.08)	1,104	(0.34)	2,558	(0.55)
ハンカチ	832	(0.32)	585	(0.18)	5,100	(1.10)
錦織	4,602	(1.79)	5,039	(1.53)	1,665	(0.36)
衣服	507	(0.20)	1,171	(0.36)	1,286	(0.28)
手袋	312	(0.12)	380	(0.12)	464	(0.10)
靴	489	(0.19)	658	(0.20)	2,194	(0.47)
金めっき物	5,331	(2.07)	4,680	(1.42)	1,220	(0.23)
小間物	6,904	(2.68)	8,007	(2.44)	3,429	(0.76)
金物	505	(0.20)	777	(0.24)	1,724	(0.37)
武器	691	(0.27)	713	(0.22)	736	(0.16)
加工皮革	2,449	(0.95)	2,979	(0.91)	3,372	(0.72)
紙と書籍	1,876	(0.73)	1,556	(0.47)	3,749	(0.80)
陶磁器	312	(0.12)	599	(0.18)	798	(0.17)
ろうそく	1,277	(0.50)	1,118	(0.34)	2,296	(0.49)
石けん	1,547	(0.60)	1,617	(0.49)	4,045	(0.87)
家具・鏡	200	(0.08)	429	(0.13)	1,635	(0.35)
宝貝	363	(0.14)	599	(0.18)	568	(0.12)
船具・網具	986	(0.38)	854	(0.26)	3,529	(0.76)
その他の製造品	6,775	(2.63)	6,032	(1.84)	6,971	(1.50)
食料	89,866	(34.91)	146,757	(44.68)	256,726	(55.12)
砂糖	27,319	(10.61)	51,264	(15.61)	64,213	(13.79)
コーヒー	15,849	(6.15)	30,408	(9.26)	80,475	(17.28)
カカオ	1,175	(0.46)	843	(0.26)	1,247	(0.27)
タバコ	452	(0.18)	1,371	(0.42)	4,512	(0.97)
茶	2,808	(1.09)	2,413	(0.73)	1,229	(0.26)
穀物	5,196	(2.02)	6,737	(2.05)	22,378	(4.81)
果実	1,978	(0.77)	1,358	(0.41)	2,675	(0.57)
食肉	2,813	(1.09)	2,434	(0.74)	5,589	(1.20)
家畜	512	(0.20)	2,339	(0.71)	4,827	(1.04)
魚	1,060	(0.41)	1,164	(0.35)	1,961	(0.42)
バター	863	(0.34)	510	(0.16)	2,081	(0.45)
チーズ	249	(0.10)	333	(0.10)	1,110	(0.24)
オリーヴ油	875	(0.34)	1,078	(0.33)	3,487	(0.75)
食塩	1,046	(0.41)	253	(0.08)	2,083	(0.45)

	ぶどう酒	17,328	(6.73)	30,420	(9.26)	33,102	(7.11)
	蒸溜酒	6,727	(2.61)	7,581	(2.31)	17,426	(3.74)
	その他の食料	3,616	(1.40)	6,251	(1.90)	8,331	(1.79)
原料		26,297	(10.21)	28,365	(8.63)	48,056	(10.32)
	繊維原料	6,926	(2.69)	4,576	(1.39)	17,934	(3.85)
	綿	2,449	(0.95)	2,421	(0.74)	10,711	(2.30)
	羊毛	975	(0.38)	1,030	(0.31)	3,334	(0.72)
	絹	2,794	(1.08)	511	(0.16)	2,693	(0.58)
	麻	59	(0.02)	100	(0.03)	255	(0.05)
	糸	644	(0.25)	514	(0.16)	930	(0.20)
	金属	1,759	(0.68)	3,752	(1.14)	5,373	(1.15)
	鉄と鋼	766	(0.30)	2,552	(0.78)	3,740	(0.80)
	銅	228	(0.09)	547	(0.17)	1,092	(0.23)
	鉛	231	(0.09)	529	(0.16)	374	(0.08)
	錫	533	(0.21)	123	(0.04)	167	(0.04)
	石炭	939	(0.36)	2,785	(0.85)	486	(0.10)
	木材	307	(0.12)	1,197	(0.36)	1,572	(0.34)
	皮革	1,813	(0.70)	378	(0.12)	370	(0.08)
	ワックス	881	(0.34)	638	(0.19)	685	(0.15)
	染料・薬品	12,200	(4.74)	11,580	(3.53)	15,720	(3.37)
	インジゴ	8,400	(3.26)	5,383	(1.64)	6,612	(1.42)
	コチニール	837	(0.33)	3,658	(1.11)	1,079	(0.23)
	ゴム	231	(0.09)	22	(0.01)	1,095	(0.24)
	サフラン	567	(0.22)	203	(0.06)	516	(0.11)
	緑青	458	(0.18)	293	(0.09)	523	(0.11)
	その他の原料	1,472	(0.57)	3,459	(1.05)	5,916	(1.27)
雑商品		6,057	(2.34)	2,991	(0.91)	4,141	(0.89)
輸出総額		257,503	(100.00)	328,487	(100.00)	465,800	(100.00)

（　）内は輸出総額に対する各商品の構成比（%）を示す。

額の53%を占め，食料は35%にとどまっているが，1776年になると製造品の割合はかなり低下し，食料の割合は逆に大きく上昇して，両者の比重は45—46%であい拮抗するようになっている。そして1788年になると，製造品の比重はさらに低下して34%にすぎなくなり，食料の比重は一層上昇して55%に達している。こうして1755年から88年にいたる間に，製造品輸出の伸び悩みと食料輸出の急増加によってフランスの輸出の基軸は製造品から食料へと明確に移動したのである。以上の製造品と食料に比べて輸出に占める原料の比重ははるかに小さく，かつ1755—88年の間目立って変化しなかったようにみえる。

つぎに，輸出された製造品，食料，原料の内容をみるならば，まず製造品はその圧倒的部分（75—80%）が繊維製品であった。この繊維製品の割合は1755年に

は総輸出の41％に達していたが，76年には36％にまで低下し，さらに88年には26％にすぎなくなっている。とくに1776年と88年との間では繊維製品の輸出額は完全に頭うちになっており，この間におけるその比重の低下がきわめて著しいことに注目すべきである。1755—88年における製造品輸出の比重低下が主にこの繊維製品輸出の停滞にもとづいていることは明らかであるが，さらにこの繊維製品の内訳に立ち入ってみると，毛織物，絹織物，麻=綿織物[24]の三つがずばぬけた重要性をもつことがわかる。そして興味深いことは，これら三種の織物の輸出のあゆみが必ずしも同一でなく，1755年から76年にかけては毛織物の比重の著しい低下と絹織物，麻=綿織物の比重のわずかな上昇が認められるのに反して，1776年から88年にかけては絹織物と麻=綿織物の比重の急激な低下が生じていることである。繊維製品の中には他にモスリン，靴下，帽子，レース，リボン，ハンカチ，錦織等が含まれているが，これらのうち帽子，レース，リボン，錦織の各商品は，いずれも1788年には1755年に比べてその比重を多かれ少なかれ減じているのである。さらに繊維製品以外の製造品としては，小間物，金めっき物，加工皮革，紙と書籍，ろうそく，石けん，船具・綱具などがめぼしいものであるが，これら商品の比率はほとんどの場合，総輸出の１％未満であり，また1755年から88年にいたる間に低下の傾向を示している。

さて，同じ時期における輸出食料の中では砂糖，コーヒー，ぶどう酒が三大品目であり，ついでカカオ，タバコ，茶，穀物，果実，食肉，家畜，蒸溜酒（ブランデー）などが多少とも重要な地位を占めていた。これらのうち1755年から88年にいたる間に輸出が最も増加したのは，再輸出品たる砂糖とコーヒーであり，総輸出に占める両者の割合は55年の17％から76年には25％に，ついで88年には31％にと，めざましく増大している。ところで，コーヒーの比重が上述の時期に一貫して増大しているのに対して，砂糖の比重は1755—76年に大きく上昇した後，1776—88年には幾分低下しており，88年にはコーヒーの比重が砂糖の比重を明確に上まわるようになっている[25]。このような砂糖，コーヒーの輸出=再輸出の動きは，当然のことながら前述の砂糖，コーヒーの輸入の動きに対応するものである[26]。さらに1776年には55年に比べてぶどう酒の輸出の伸びが目立っており，以上の三商品の輸出の急増がこの間における食料輸出の比重の著しい上昇をもたらした主要な原因であったことがわかる。これに対して，1776—88年における食料輸出の比重の一層の増大については，コーヒー輸出の

急増が決定的な役割を果たしたが，その他にも穀物と蒸溜酒の輸出が，1788年にはめざましい伸びを示していることに注目しておこう。[2]

最後に，この時期に輸出された原料の中では，繊維類，金属，染料・薬品類の三つが主要なものであった。1776年には55年に比べてインジゴと絹（主に撚糸）の輸出の減退が目立っており，そこにこの間の原料輸出の比重低下の原因がもとめられる。これに対して，1776年から88年にかけては繊維原料，なかんづく綿の輸出の急増によって，[28] 総輸出に占める原料の比重は再び上昇を示すのである。

ここで，上述の時期にフランスの輸出貿易においてとくに重要な意義をになっていたいくつかの商品について，その輸出額の変動をより細かくたどってみよう。表9[29]によると，製造品の主力をなす繊維製品は1750年に総輸出の43％を占めていたが，その比重は1754—55年には39—41％となってすでに若干の低下を示し

表9　繊維製品と食料品の輸出の推移　（単位　千リーヴル）

年	輸出総額	毛織物	絹織物	麻＝綿織物	繊維製品全体	砂糖	コーヒー	ぶどう酒
		%	%	%	%	%	%	%
1750	243,703	28,781(11.8)	14,893(6.1)	34,972(14.4)	105,303(43.2)	26,633(10.9)	9,030(3.7)	19,929(8.2)
1754	285,958	35,402(12.4)	19,413(6.8)	40,073(14.0)	112,185(39.2)	34,346(12.0)	17,489(6.1)	22,759(8.0)
1755	257,507	30,308(11.8)	21,677(8.4)	33,692(13.1)	104,759(40.7)	27,319(10.6)	15,849(6.2)	17,328(6.7)
1766	345,753	34,878(10.1)	21,792(6.3)	33,855(9.8)	110,193(31.9)	87,425(25.3)	13,121(3.8)	33,649(9.7)
1770	298,206	24,294(8.2)	24,041(8.1)	28,227(9.6)	89,517(30.0)	34,654(11.6)	41,304(13.9)	37,605(12.6)
1771	332,737	28,984(8.7)	27,289(8.2)	31,488(9.5)	105,369(31.7)	47,080(14.2)	46,419(14.0)	35,999(10.8)
1772	319,646	34,503(10.8)	31,465(9.9)	35,311(11.1)	117,894(37.1)	32,501(10.2)	45,489(14.3)	24,970(7.9)
1773	333,709	31,876(9.6)	31,966(9.6)	35,605(10.7)	116,532(34.9)	35,574(10.7)	42,954(12.9)	20,793(6.2)
1774	318,929	27,775(8.7)	34,031(10.7)	37,369(11.7)	120,099(37.7)	39,462(12.4)	35,061(11.0)	24,452(7.7)
1775	332,043	26,466(8.0)	33,928(10.3)	42,894(13.0)	124,667(37.5)	50,946(15.4)	33,189(10.0)	26,273(7.9)
1776	329,190	20,437(6.2)	29,864(9.1)	46,253(14.1)	118,206(35.9)	51,264(15.6)	30,408(9.2)	30,420(9.2)
1777	367,672	22,679(6.2)	33,953(9.3)	44,575(12.2)	120,165(32.7)	78,119(21.3)	31,901(8.7)	35,699(9.7)
1787	446,025	21,890(4.9)	16,753(3.8)	45,421(10.2)	114,429(25.7)	56,427(12.7)	69,899(15.7)	32,069(7.2)
1788	465,800	23,683(5.1)	15,928(3.4)	49,928(10.7)	118,861(25.5)	64,213(13.8)	80,475(17.3)	33,102(7.1)

（　）内は各年度の輸出総額に対する各商品の構成比（％）。1787年の数字は東インド向け輸出を含まず。

ている。総輸出に占める繊維製品の比率は1766，70，71の各年には資料が網羅的でない[30]ためもあって1754—55年に比べかなり低くなっているが，1772，74，75の各年には37—38％に達しており，1754—55年に比べてそれほど低下しているとはいえない。この繊維製品の比重が急速に低下するのは1776年以後，とくに80年代においてであり，1787—88年には繊維製品はもはや総輸出の26％を占めるにすぎなくなっている。

このような繊維製品輸出を品目別にみるならば，つぎのことが明らかになる[31]。まず毛織物の輸出は1754，66，72の各年にとくに高額に上っているが，平均してみると総輸出に占めるその比重は1750—55年の約12％から1766—72年には8—11％へと明らかに低下を示している。しかし，毛織物の比重がコンスタントに低下するのは1773年からであり，1776—77年にはこの比重は6％余りとなって1754年のピーク時の2分の1にすぎなくなり，1787—88年にはさらに低下して5％前後となっている。絹織物の輸出額は1755年と66年とではほとんど変化がなく，総輸出に占めるその割合はかなり低下しているが，1770年代に入るとともに絹織物輸出はその絶対額，総輸出に占める比重ともに著しい増加を示し，1774年にそのピークに達している。絹織物の輸出額はその後1780年まで高い水準を記録しつづけており[32]，この70年代をもって18世紀フランスにおける絹織物輸出の最盛期とみなすことができよう。しかし，このように躍進をとげた絹織物輸出も80年代にはドラスティックに減少し[33]，1787—88年になると絶対額で1774年の2分の1以下，総輸出に占める割合では約3分の1にすぎなくなるのである。最後に，麻=綿織物の輸出額は1750—55年に総輸出の13—14％を占めた後，1766—73年にはその比重を若干低下させたが，74年から76年にかけてめざましい増加をとげ，76年には1750年代の比重にまで回復している。しかし，1774年のピーク時の絹織物の輸出額が1755年の約1.5倍に達しているのに対して，1776年の麻=綿織物の輸出額は1754年の1.15倍にしか増加しておらず，麻=綿織物の輸出は1750年代から70年代まで全体として伸び悩みの状態にあったといわねばならないであろう。この麻=綿織物の輸出は1780年代にも毛織物や絹織物の輸出のように衰退してはおらず，絶対額の点では1788年に18世紀後半での最高を記録しているが[34]，しかし総輸出に占めるその比重は1775—76年に比べて明らかに低下しているのである[35]。

以上に考察したところから，フランスの総輸出に占める繊維製品の比重の低

下は，1750年から75年にかけてはきわめて緩慢に，76年以後ははるかにより急速に進行したこと，また1770年代までは主に毛織物と麻=綿織物との比重の低下が全体としての繊維製品輸出の比重の低下を生ぜしめているのに対して，1780年代には毛織物と麻=綿織物の輸出の停滞に加えて，とくに絹織物の輸出の急激な減少が繊維製品輸出の比重低下の原因をなしていること，を確認できるであろう。それでは，このような繊維製品輸出の動きに対して，食料の主力をなす砂糖，コーヒー，ぶどう酒の輸出はどのような変動を示しているであろうか。同じく表9によると，砂糖の輸出額は1766年に異常な増加を示しているが，この数字は同じ年の砂糖輸入額の2倍半にも達するため(前掲表6参照)，疑わしいとしなければなるまい。砂糖の輸出が顕著に増加するのは1775年から77年にかけてであり，その輸出量，輸出額，総輸出に占める比重はいずれも1777年に18世紀の最高を記録する。これに対して，コーヒーの輸出はその輸入と同じく1770—71年に飛躍的に増加した後，1773年から77年にかけてはその絶対額，総輸出に占める比率ともかなり低下している。ところで，1770—71年は総輸出に占めるぶどう酒の比重が18世紀後半で最高に達した年でもあり，われわれはこの両年において砂糖，コーヒー，ぶどう酒の三商品が総輸出の38—39%という大きな割合を占めていたことに注目する必要があろう。前述のように1776年には総輸出に占める食料の比率が製造品の比率とほぼ拮抗していたのであるが，この76年に上記三商品の比率は34%にとどまっていた。このことからみて，1770—71年に食料輸出の比重が製造品輸出の比重を多少とも上まわっていたことは確実と考えられる。

しかるにそれにつづく1772—75年には，砂糖，コーヒー，ぶどう酒の比率の合計値が30—33%程度に低下する一方，繊維製品の比率は1770—71年に比べて明らかに上昇しており，したがって総輸出に占める製造品の比重は食料の比重に匹敵するか，あるいはこれを若干上まわったであろう。食料の比重が製造品の比重を決定的に上まわったとみられるのは1777年であり，この年には繊維製品の比率が前年の36%から33%に低下する一方，砂糖，コーヒー，ぶどう酒の比率は前年の34%から40%へと急上昇しているのである。これら三商品の比重は1787—88年には，砂糖輸出の比重の低下とぶどう酒輸出の頭うちにもかかわらず，コーヒー輸出のめざましい増加によっていぜん総輸出の34—38%に達しており，これらを主力とする食料の輸出は繊維製品を主力とする製造品の輸出

を遠く引きはなしてフランス輸出貿易の基軸を形づくるようになったのである。

このようにみるとフランスの輸出貿易は，1750—55年の製造品が最大部分を占めるような構造から，1770—76年には製造品と食料とがほぼ拮抗した割合を占めるような構造へと移行し，ついで1777年以後，80年代においては食料が最大部分を占めるような構造へと転換をとげたものと考えられよう。それでは，このような18世紀後半における輸出構造の推転を18世紀全体のパースペクティヴの中においてみるならば，どのような見通しを立てることができるであろうか。再びアルヌーのデータによれば，1716年における輸出の商品別構成は，さきの表7が示すように，原料6％，食料35％，製造品が37％（うち繊維製品は30％），植民地物産15％となっている。これらのうち植民地物産はその圧倒的部分が砂糖，コーヒー，カカオなどの食料品と考えられるので，1716年に食料が総輸出の最大部分を占めていたことは疑いのないところである。これを前述の1755年の状態と比較するならば，製造品の割合が55年の53％に対して16年には37％，また繊維製品の割合が55年の41％に対して16年には30％というように，ともに著しく低くなっていることが注目される。この両年の数字は出所がいく分異なるため，その比較には慎重を要するが，しかし上の数字からみて，1716年から55年にいたる間にフランスの総輸出に占める製造品と繊維製品の割合が目立って上昇したことは確実であろう。また1755年には16年に比べて食料の比重が著しく低下したことが認められるが，注意すべきは，この間に比重が低下したのは植民地物産以外の食料品，なかでもぶどう酒，蒸溜酒など飲料品の輸出であって[36]，砂糖，コーヒーなど植民地産食料品の輸出は同じ時期にその比重を多少とも増大させたものと推定されることである[37][38]。

以上に述べたところから，18世紀初頭から大革命前夜までのフランスの輸出の商品別構成の変化について，およそつぎのように考えることができるのではなかろうか。フランスの輸出貿易は1716年には食料が最大部分を占めるような構造をとっていたが，その後製造品，とりわけ繊維製品の輸出が食料の輸出よりも急激に増加することによって，1755年までに，おそらくは1750年までに，製造品が最大部分を占めるような構造へと転換をとげた。しかるにその後，製造品の輸出の伸び悩みと食料の輸出の着実な増加によって輸出に占める製造品の比重低下と食料の比重上昇とが進行し，こうして1770年代には両者の比重はほぼあい拮抗するようになり，さらに1780年代になると輸出貿易は再び食料が最

大部分を占めるような構造をとるようになった，と。ただし，1716年には輸出される食料の大半が飲料品を主体とする国産品であったのに反して，80年代には砂糖，コーヒーに代表される植民地物産が輸出食料の大部分を占めるようになったことに注意する必要がある。

さて，筆者は本稿第Ⅰ節において，従来の諸研究がいずれも18世紀フランスの貿易構造（輸出入の商品別構成）を世紀の初頭と末葉との二つの時点でのみとらえ，その中間の時期に関する考察を欠落させていることを指摘したが，このような方法によっては18世紀フランス貿易構造の進化を正しく把握しえないことは，今や明らかであろう。たしかに，大革命前夜の輸出入の商品別構成を18世紀初頭のそれとのみ比較するならば，原料，食料，製造品という三つの商品群の比重は輸入，輸出のいずれにおいても大きくは変化しておらず，両時期とも食料が輸入および輸出の最大部分を占めており，また輸出に占める製造品の比率は３分の１強にとどまっている。しかし，この二つの時期の中間の18世紀中葉には，フランスの対外貿易は原料が総輸入の約２分の１を，また製造品が総輸出の約２分の１を，占めるような構造をとっていたのである。筆者が確認しえた限りでは，輸入の商品別構成はまず1716年から1754—55年にいたる間に食料の比重の低下と原料の比重の大幅な上昇とによって，ついで1766年から1776—77年にかけては逆に原料の比重の急低下と食料の比重の急上昇とによって，いずれも顕著な変化をとげた。また輸出の商品別構成も，まず1716年から1750年にいたる間に製造品の比重の大幅な上昇と食料の比重の著しい低下とによって，ついで1754—55年から1787—88年にかけては逆に製造品の比重の着実な低下と食料の比重の大幅な上昇とによって，これまた重大な変化をとげたのである。このようにみれば，レオンのように[36]，フランスの貿易構造が18世紀に目立って変化しなかったとか，フランスの総輸出に占める工業生産物の割合がほとんど停滞していたとかいえないことは明らかであろう。18世紀におけるフランス工業生産の躍進とそれにつづく成長の緩慢化とは，総輸出に占める製造品の比重の上昇，ついでその低下として貿易構造のうちに明瞭に反映されているというべきである。それでは，上述のような輸出入の商品別構成の変化は，前節で述べた輸出入の地域別構成の変化とどのように関連し合っているのであろうか。この点を全面的に検討することは筆者の現在の能力を超えるので，次節においては輸入額または輸出額が比較的大きな若干の商品を取り上げ，それ

らの輸出入先の構成が18世紀後半にどのように変化したかという点に，考察をくわえてみることにする。

（1） 1755, 76年については，それぞれの年度の輸出入商品一覧表（1755年は Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155—1, 1776年は Arch. Nat., F^{12} 243）によった。1788年についてはヨーロッパ，アメリカおよび西アフリカ植民地，東インドの各地域について作成された輸出入商品一覧表（Arch. Nat., F^{12} 1835 et Col., F^{2B} 13）のデータを総合した。なお，1788年については他に，表1，2，3において利用した総括的な輸出入統計（Arch. Nat., F^{12} 251）が存在するが，本節と次節ではより詳細な地域別の一覧表を用いることにする。

（2） 輸出入商品一覧表には1755年の場合，約700，1776年の場合にも約400にのぼる商品名が記載されている。これらの中には，『雑商品』《Marchandises meslées》の名称で記されているもののほか，原料，食料，製造品のいずれに入れるべきか明らかでないものが相当数存在するので，それらを雑商品の名の下に一括して示すことにした。また，18世紀の分類法では各種の染料・薬品類を原料とは別に《drogueries》なる名称で示すならわしとなっているが，ここではこれを原料の中に含めた。

（3） 綿の中での綿花と綿糸の比は，1755年には7対3であり，1776年と88年には9対1であった。

（4） 絹の中には少量の繭，撚糸，玉糸なども含まれているが，圧倒的大部分は生糸 soie crue であった。

（5） この輸入された金属のうち，鉄，銅，錫については加工品が少量ながら含まれている。

（6） 輸入された魚類の中では，ニューファンドランド沖からの塩漬たらが圧倒的部分を占める。

（7） 輸入家畜のうち牛，豚，羊，山羊は食料に，馬，ろば，らばは原料に分類した。この点は表8の輸出家畜の場合も同様である。

（8） 輸入食肉の大部分はアイルランド産の塩漬牛肉であった。

（9） トワル toiles とは元来，麻織物を指す語であるが，18世紀のうちに綿入り麻織物，さらに純綿織物の生産と使用が広がるにつれて，これらの総称として用いられるようになった。輸入されたトワルの中でこれら三種類の織物がしめる割合を明確にすることは，統計的に不可能であるが，1776，88の両年に綿入り麻織物と純綿織物が全体の半ば以上をしめていたことは，ほぼ確実である。

（10） Chaptal の提供するデータによると，1771—76年に東インドからの輸入額は年平均2,340.6万リーヴルであり，そのうち繊維製品は1,141.8万リーヴル（49%）を占めていた。Chaptal, *op. cit.*, t. I, p. 131. ところで，前述の *Encyclopédie Méthodique, Commerce* の統計によると，1755年頃の東インドからの輸入額は年平均2,000万リーヴルを超えており，そのうち40%が繊維製品と仮定しても，その輸入額は800万リーヴル以上に達することになる。いま，これを表5における1755年の繊維製品輸入額に加算すると，2,275万以上となり，その場合，総輸入に占める繊維製品の比率は9%以上に達することになるのである。

（11） それぞれの年度の輸出入商品一覧表により作成。1754, 55年：Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155-1；1766, 70, 71, 73, 74年：Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155-4; 1772年：Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 849；1775, 76, 77, 78年：Arch. Nat., F^{12} 242, 243, 245, 246；1782年：Arch. Nat., F^{12} 249 et Col., F^{2B} 9；1787年：Arch. Nat., F^{12} 250 et F^{12} 1835；1788年：Arch. Nat., F^{12} 1835 et Col., F^{2B} 13. 1787年の東インドからの輸入額については，Chaptal, *op. cit.*, t. I, pp. 132—134. なお，本表の輸入総額は1787，88両年をのぞいて金銀・貨幣を含んでいる。

(12) 1766, 70, 71, 73, 74の各年の羊毛輸入額は，輸入額の僅少な羊毛の1，2の品目に関する数字が欠落しているために，いく分過小評価になっている。

(13) 1770—71年については，絹のうち生糸 soye crüe の輸入額しか明らかでない。しかし，右表の生糸輸入額の推移からみて，絹全体の輸入額が1770—71年には1766年よりも低下したことは疑いをいれないであろう。

	(千リーヴル)
1754年	19,529
1755〃	16,522
1766〃	9,465
1770〃	6,482
1771〃	6,063
1772〃	5,736
1773〃	12,092
1774〃	6,298
1775〃	5,944
1776〃	10,406
1777〃	8,775

(14) コーヒーの価格は，1763—67年には1749—55年よりも低い水準に安定していたが，1768年から71年まで急激に上昇する。ついで1772—76年には暴落をこうむるが，77年から89年にかけては規則的に上昇する。Cf. Tarrade, *op. cit.*, t. II, pp. 771—772. このようにコーヒー価格は振幅がとりわけ大きく，その輸入額の増減は輸入量の増減をそのまま表わしてはいない。

(15) 砂糖は次節で述べるように，そのほとんどがアメリカ植民地から輸入されていたが，その輸入量が1778年に最高を記録することはタラードによって確認されている(*op. cit.*, t. II, p. 747)。

(16) コーヒー輸入量は，その後1789—90年に再び大幅に増加しており，その輸入額は1789年に18世紀の最高（10,416万リーヴル）に達したとみられる。*Ibid.*, pp. 747, 772 および1789年の輸出入商品一覧表（Arch. Nat., F^{12} 251）参照。

(17) ただし，綿花の輸入量が18世紀の最高に達したのは1788年である。Cf. Tarrade, *op. cit.*, t. II, pp. 748—749.

(18) これについては，Tarrade, *op. cit.*, t. I et II のほか，浜忠雄「フランス旧植民地体制の諸問題（I）」（札幌商科大学・札幌短期大学『論集』13, 1974年）；前掲拙稿「フランス植民地貿易」等を参照。

(19) Arnould, *op. cit.*, t. III, Tableau 2 にもとづき作成。表中の「植民地物産」はフランスの植民地から輸入されたもののみを示す。

(20) 1716年にはイギリスから毛織物，綿織物，加工皮革，金物など，合計603万リーヴルにのぼる製造品が輸入されていたが，これは同年のイギリスからの総輸入額の39%に相当する。Arnould, *op. cit.*, t. III, Tableau 1. これに対して，1755年の貿易統計に記載されたイギリスからの繊維製品輸入はわずか数百リーヴルにすぎないのである。このような繊維製品輸入の激減，あるいはその事実上の消滅こそ，18世紀中期以降フランスの総輸入にしめるイギリスの比重を大きく低下させた最大の要因であろう。フランスは1701年にイギリス側の輸入制限政策に対する報復措置として，イギリスの毛織物，靴下，帽子．加工皮革．金物，刃物，小間物など約15の商品の輸入を全面的に禁止し，さらに綿=麻織物 toiles を含む約30の商品の輸入関税を大幅に引き上げた（1701年9月6日の枢密院勅令）。Cf. Levasseur, *op. cit.*, t. I, p. 405—406；A. Arnauné, *Le commerce extérieur et les tarifs de douanes*, Paris, 1901, p. 28；Dardel, *Navires et marchandises*, pp. 67—70. このような輸入制限政策は，最初は必ずしも厳格に実施されなかったごとくであるが，その後しだいに強化されて，18世紀中葉ともなればイギリスの製造品を，輸入の合法ルートからはほとんどしめ出すにいたったようにみえる。ダルデルによると，初期には1701年勅令の輸入禁制品についても，政府によって特定の商人に特定品目の輸入許可状が与えられていたという。また，1701年勅令の中に輸入禁制品または輸入許可品として列挙されている商品以外のイギリス商品について，1713年2月5日勅令はそれらの輸入を関税付きで認めていたが，1743年に至ってそれらの商品の輸入は原則として禁止された。*Ibid.*, p. 70.

(21) これらの動・植物性原料の輸入額は，1716年に1,256.3万リーヴルであった。Arnould, *op.*

cit., t. III, Tableau 2.

(22) ここで表7の1787年に関する数字をみると，総輸入の内訳は原料36%，食料42%，製造品20%となっており，1788年に関するわれわれの数字（前掲表5）に比べて食料の比重がかなり低く，製造品の比重がかなり高い。しかし，貿易差額事務局の統計（Arch. Nat., F^{12} 251 の輸出入商品一覧表）によってみても1787年には88年に比べて食料の比重はかなり低く，製造品の比重はかなり高くなっており，表7のアルヌーの数字との間に基本的な一致が認められる。

(23) 前掲表5と同じく，本節の注(1)に記した諸史料にもとづき作成した。

(24) この輸出された麻=綿織物 toiles の中で純綿織物，綿入り麻織物が占める割合は，1755年にはネグリジブルであったが，76年には少くとも700万リーヴル，全体の15%にまで上昇し，ついで88年になると1,200万リーヴル以上，全体の25%前後を占めるようになった。ただし，この輸出綿織物の大部分はインド綿布を主力とする外国製品の再輸出分であり（1788年にインド綿布の再輸出はモスリンを合わせると877万リーヴルにのぼった），国産品のみをとれば，輸出トワルの圧倒的部分は18世紀を通じて麻織物（より正確には亜麻織物）であった。

(25) この点はタラードによって実証されている。Tarrade *op. cit.*, t. II, tableau VIII. また前掲拙稿「フランス植民地貿易」，27頁を参照。

(26) 砂糖の輸入量に対する輸出量の比は，1776年62%，88年68%であり，コーヒーの輸入量に対する輸出量の比は76年78%，88年90%であって，両商品とも再輸出率はきわめて高い。Tarrade, *op. cit.*, t. II, tableau VII を参照。

(27) 1788年における穀物輸出の内訳をみると，小麦が全体の49.6%（1,110.4万リーヴル），小麦粉が32.0%（715.3万リーヴル），ライ麦が6.5%（148.5万リーヴル），燕麦が2.3%（52.3万リーヴル）をそれぞれ占めている。また輸出先としては，輸出小麦の半分近くを受取るスペインと，小麦粉の80%を吸収するアメリカ植民地とがとびぬけて重要であったが，1776年に比べてとりわけ伸びがめざましいのはスペイン向け小麦輸出である。このような穀物輸出の急増は，1787年6月17日の布告による穀物輸出の自由化の結果として生じたものであるが，しかし翌88年の凶作による食糧危機に直面して，財務総監ネッケルは早くも同年9月7日に穀物輸出の停止を命じた。Levasseur, *op. cit.*, t. I, pp. 501—507. こうして翌89年には穀物輸出はドラスティックに減少する。

(28) 輸出された綿の中では1788年に綿花が7割強を，綿糸が3割弱を占めていた。綿花の輸出は1784年からにわかに増加しはじめ，85—89年にはフランスの綿花輸入量の37%が再輸出されている。Tarrade, *op. cit.*, t. II, tableau VII；前掲拙稿，28頁を参照。

(29) 1750年については，Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Manuscrits 84—87 の国別・地域別の輸出入商品一覧表のデータを総合した。その他の年度については，本節の注(11)に記した諸史料によっている。なお，本表の輸出総額は1787，88両年をのぞき金銀・貨幣を含む。

(30) 1766，70，71の各年および73，74両年の繊維製品の輸出額は，史料の性質上輸出額10万リーヴル未満の品目を含んでいないため，多かれ少なかれ過小評価になっており，他の年度の数字と厳密には比較できないものである。

(31) 以下に述べる毛織物と麻=綿織物の場合にも，1766，70，71，73，74の各年の輸出額は，前注に述べたのと同じ理由でいく分過小評価になっている。なお，絹織物の輸出に関する数字はこの欠陥をまぬかれている。

(32) 絹織物の輸出額は1778年2,928万リーヴル，79年3,186万リーヴル，80年3,246万リーヴルとなっている。各年度の輸出入商品一覧表（Arch. Nat., F^{12} 246, 247, 248）による。このように絹織物の輸出がフランスのアメリカ独立戦争参戦（1778年）後も減少しなかったのは，その主たる市場がヨーロッパ大陸の内部にあったためである。この点については後述46頁，表14を参照。

(33) 絹織物の輸出額は，1781年には2,429万リーヴル，82年には1,599万リーヴル（ただし植民地向けをのぞく）というように，急激に減少した。各年度の輸出入商品一覧表（1781年：Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155-4, 82年：Arch. Nat., F^{12} 249）による。

(34) 貿易差額事務局の統計によれば，1756年に5,287万リーヴルという巨額の麻=綿織物が輸出されたことになっており，これが麻=綿織物の年間の輸出額としては最高値なのであるが，しかしこの数字は以下の点からみて疑問としなければならない。即ち，この麻=綿織物の中にはブルターニュ産の広幅亜麻織物 toile large de Bretagne が2,000万リーヴル余り含まれているが，この種の織物は1754，55年には400—470万リーヴルが輸出されるにとどまっており，56年にその輸出が一挙に数倍に増加したとは考え難い。また，この広幅織はほとんど全部，スペイン一国へ輸出されているのであるが，すでに七年戦争が始まっていたこの年に，スペインとその植民地に対する織物輸出が急激に拡大したとは考えられない。1756年の麻=綿織物輸出は，おそらく上述の広幅織に関する数字の写し誤りの故に，大幅に過大評価になっている可能性が強く，本稿ではこれを採用しないことにした。数字は各年度の輸出入商品一覧表（Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 155-2）による。

(35) もう一つの注目すべき変化として，1780年代には70年代に比べて，麻=綿織物の輸出に占める外国製品（とくにインド綿布）の割合が増大したことをあげなければならない。即ち，統計的に確認しうる外国産麻=綿織物の輸出額は，1776年の443.5万リーヴル（全体の9.6%）から88年には804.6万リーヴル（16.1%）へと増加したのである。各年度の輸出入商品一覧表による。

(36) ぶどう酒，蒸溜酒，酢，ビール，リキュール酒など飲料品の輸出は，1716年には2,869万リーヴル，輸出総額の27.2%に達しており，繊維製品に次ぐ重要輸出品であった。しかるに1755年になると，飲料品の輸出額は2,449万リーヴルに低下し，総輸出に占めるその比重も9.5%にすぎなくなっている。Arnould, *op. cit.*, t. III, Tableau 2；1755年の輸出入商品一覧表による。

(37) 砂糖，コーヒー，カカオ，しょうがといった植民地産食料品は，1755年には合計4,445万リーヴルが輸出されており，総輸出の17.3%に相当した。同年の輸出入商品一覧表による。これに対して1716年には，前掲表7が示すように植民地物産の総輸出に占める割合は，綿花，インジゴなどの原料を含めても，15.3%にとどまったのである。

(38) ちなみに，1787年に関する Arnould のデータは食料と原料とを植民地物産として一括しているため，われわれの分析結果との対照は不可能である。ただし，製造品とそのうちの繊維製品とが総輸出に占める割合については，Arnould の数字は1788年に関するわれわれの数字（表8）と非常によく一致している。

(39) Léon, Structure du commerce, p. 418.

Ⅵ　主要商品の輸出入先の変動

われわれが前節で確認したところによれば，フランスの輸入の商品別構成は1716年から55年にかけては原料の比重の上昇と食料の比重の低下によって，ついで1766年から76—77年にかけては逆に原料の比重の低下と食料の比重の上昇によって，いずれも注目すべき変化をとげた。いま，その原料と食料のうちから，それぞれを代表する繊維原料（獣毛と糸をのぞく）と砂糖，コーヒーとを選び，各々の輸入先の構成を示すならば，表10，11[(1)]のようである。

表10　繊維原料の輸入先

（単位　千リーヴル）

輸入先	綿			羊毛			絹			麻			合計		
	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年
スペイン	—	—	13 (0.03)	10,564 (51.5)	12,135 (67.0)	5,307 (30.5)	2,713 (13.8)	77 (0.6)	257 (1.1)	23 (0.9)	33 (0.7)	175 (1.9)	13,300 (24.8)	12,245 (22.8)	5,753 (6.4)
ポルトガル	72 (0.6)	679 (3.7)	2,368 (5.9)	19 (0.1)	149 (0.8)	146 (0.8)	—	—	51 (0.2)	—	—	34 (0.4)	91 (0.2)	828 (1.5)	2,599 (2.9)
イタリア	39 (0.4)	472 (2.6)	406 (1.0)	973 (4.7)	1,851 (10.2)	1,028 (5.9)	12,954 (65.9)	8,272 (67.6)	16,652 (71.9)	172 (6.9)	880 (18.1)	1,163 (12.5)	14,138 (26.4)	11,475 (21.4)	19,249 (21.3)
ドイツ	3 (0.03)	15 (0.1)	89 (0.2)	14 (0.1)	28 (0.2)	1,101 (6.3)	0.6	—	77 (0.3)	192 (7.8)	106 (2.2)	1,795 (19.4)	209 (0.4)	149 (0.3)	3,061 (3.4)
スイス	3 (0.03)	6 (0.03)	445 (1.1)	30 (0.1)	—	49 (0.1)	3,177 (16.2)	997 (8.1)	186 (0.8)	—	6 (0.1)	—	3,210 (6.0)	1,008 (1.9)	679 (0.8)
イギリス	2 (0.02)	—	355 (0.9)	288 (1.4)	51 (0.3)	214 (1.5)	—	—	589 (2.5)	—	—	216 (2.3)	290 (0.5)	51 (0.1)	1,373 (1.5)
オランダ	65 (0.6)	18 (0.1)	55 (0.1)	178 (0.9)	124 (0.7)	1,111 (6.4)	1 (0.01)	—	—	412 (16.7)	311 (6.4)	679 (7.3)	658 (1.2)	454 (0.8)	1,844 (2.0)
ハンザ諸都市	8 (0.07)	—	—	768 (3.7)	776 (4.3)	969 (5.6)	—	—	—	308 (12.5)	593 (12.2)	466 (5.0)	1,084 (2.0)	1,369 (2.6)	1,435 (1.6)
ロシア	—	—	—	—	42 (0.2)	—	—	—	—	1,252 (50.6)	2,691 (55.4)	4,224 (45.5)	1,252 (2.3)	2,733 (5.1)	4,224 (4.7)
レヴァント	7,145 (65.1)	11,367 (61.5)	14,073 (34.8)	7,598 (37.1)	2,934 (16.2)	7,475 (43.0)	804 (4.1)	1,516 (12.4)	3,068 (13.2)	47 (1.9)	84 (1.7)	—	15,594 (29.1)	15,901 (29.6)	24,617 (27.3)
アメリカ植民地	3,639 (33.2)	5,887 (31.8)	21,782 (53.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3,639 (6.8)	5,887 (11.0)	21,782 (24.1)
東インド	—	45 (0.2)	814 (2.0)	—	—	—	—	1,383 (11.3)	1,833 (7.9)	—	—	—	—	1,427 (2.7)	2,647 (2.9)
その他	—	—	—	66 (0.3)	—	—	—	—	466 (2.0)	66 (2.7)	153 (3.1)	522 (5.6)	132 (0.2)	153 (0.3)	988 (1.1)
合計	10,975 (100.0)	18,489 (100.0)	40,400 (100.0)	20,498 (100.0)	18,090 (100.0)	17,399 (100.0)	19,650 (100.00)	12,244 (100.0)	23,179 (100.0)	2,473 (100.0)	4,857 (100.0)	9,274 (100.0)	53,596 (100.0)	53,680 (100.0)	90,252 (100.0)

（　）内は各商品の輸入総額に対する各地域の構成比（%）を示す。

まず，綿，羊毛，絹，麻からなる繊維原料は，1755年に総輸入の24%，また原料輸入全体の48%を占めていたが（前掲表5参照），その輸入先としては，表10が示すように，レヴァント（トルコと北アフリカ），イタリア，スペインという地中海沿岸地域が抜群の重要性をもち，三者で全体の80%を集中している。これらのうちレヴァントは綿の輸入先の中で，全体の65%を集中して断然首位を占めている[2]だけでなく，羊毛の輸入の37%をも供給しており，またイタリアは絹（主に生糸）の輸入の66%を集中して，この分野で支配的な地位を占めている[3]。さらにスペインは羊毛の輸入の50%強を集中しているだけでなく，絹の輸入の14%をも供給している。以上の三地域に比べて，繊維原料の輸入に占める海外植民地の比重はきわめて小さく，わずかにアメリカ植民地が綿の輸入の33%を供給している[4]のが注目されるにとどまる。ところで，1776年になると総輸入に占める繊維原料の割合は15%へと大きく低下するが，とくに目を引くのは，イタリア，スペインからの絹の輸入[5]とレヴァントからの羊毛の輸入がともに著しく減少し，レヴァントとアメリカ植民地からの綿の輸入が大幅に増加したことである。こうしてレヴァント，イタリア，スペインは1776年にもいぜんフランスの繊維原料の主要な輸入先としてとどまっているものの，レヴァントからの輸入額は55年に比べてほとんど増加しておらず，またイタリア，スペインからの輸入額は55年に比べて絶対的に減少している。前掲の表2によれば，フランスの総輸入に占めるレヴァント，イタリア，スペインの比重は1771—77年には1749—55年に比べて多かれ少なかれ低下しているが[6]，この比重低下の最大の原因がこれら諸国からの繊維原料の輸入の伸び悩みもしくは減退にあったことは，ほぼ疑いのないところであろう[7]。なお，1776年については麻の主要な輸入先としてのロシアの比重の増大，絹の輸入の激減によるスイスの比重の低下にも注意しておく必要がある。

さて，1788年になると総輸入に占める繊維原料の割合は76年よりも幾分増加して17%強となる。この年には，アメリカ植民地の比重が綿（綿花）の輸入のめざましい増加によって急上昇する一方，スペインの比重が羊毛輸入の激減のゆえに甚だしく低下したことが，何よりも注目を引く。フランスの総輸入に占めるスペインの比重が大革命の前夜に著しく低下するのは，この羊毛輸入の激減によるところが大きいであろう。一方，レヴァントの比重は，綿，羊毛，絹の輸入がそろって増加をみせたにもかかわらず76年に比べていく分低下してお

り，またイタリアの比重は絹輸入の急増の結果として76年と全く同一の水準を維持している。こうして大革命の前夜には，レヴァント，イタリアとアメリカ植民地がフランスの繊維原料の主要な輸入先となっているが，東インドをも含めた海外植民地の比重が18世紀中葉に比べて著しく増大したことに注目する必要があろう。[8]

表11　砂糖とコーヒーの輸入先　（単位　千リーヴル）

	アメリカ植民地	ブルボン島	その他
砂糖	%		%
1755年	35,525(99.96)	—	15(0.04)
1776〃	79,405(99.94)	—	44(0.06)
1788〃	89,574(99.34)	—	597(0.66)
コーヒー	%	%	%
1755年	13,181(96.40)	—	492(3.60)
1776〃	35,321(91.53)	3,248(8.42)	18(0.05)
1788〃	87,642(94.27)	4,764(5.12)	568(0.61)

つぎに砂糖とコーヒーとは，両者で1755年に総輸入の22%，食料輸入の59%を，また76年には総輸入の32%，食料輸入の62%を，それぞれ占めており，その輸入の増減が輸入全体の商品別構成の変化に及ぼす影響はきわめて大きかったものと考えられる。表11によれば，フランスが輸入した砂糖は1755，76，88のいずれの年度においても，その99%以上がフランスのアメリカ植民地からもたらされている。またコーヒーも，その輸入額の90%以上が同じくアメリカ植民地からもたらされており，残りの大部分もフランス領である南インド洋上のブルボン島から輸入されている。それ故，フランスの総輸入に占める砂糖とコーヒーとの比重が18世紀の初頭から1777—78年までほぼ一貫して増大しつづけたということは，とりもなおさず，フランスの輸入に占める植民地の，なかんずくアメリカ植民地の比重が増大しつづけたことを意味するであろう。[9]

さらに，大革命の前夜にその輸入が目立って増加した繊維製品についても，その輸入先の構成を一瞥しておくことにしよう。表12[10]によると，1776年には，当時世界第一の綿織物生産地であった東インドがフランスの輸入する繊維製品の56%を供給している。[11]またヨー

表12　繊維製品の輸入先　（単位　千リーヴル）

輸入先	1776年	1788年
	%	%
ドイツ	7,076 (17.8)	15,836 (22.0)
スイス	5,176 (13.0)	2,249 (3.1)
イギリス	4 (0.01)	19,102 (26.5)
オランダ	1,879 (4.7)	1,397 (1.9)
ハンザ諸都市	1,039 (2.6)	2,550 (3.5)
スペイン	192 (0.5)	338 (0.5)
ポルトガル	89 (0.2)	437 (0.6)
イタリア	1,743 (4.4)	1,263 (1.8)
レヴァント	271 (0.7)	1,884 (2.6)
東インド	22,202 (55.7)	26,214 (36.4)
その他	173 (0.4)	731 (1.0)
総計	39,844(100.0)	72,002(100.0)

ロッパ諸国の中では，麻織物の大生産地フランドルを含むドイツが最も重要であり，スイスがそれにつづいていた。[12] しかるに，1788年になると，繊維製品の輸入額が76年に比べて大幅に増加しただけでなく，その輸入先にも著しい変動が生じた。即ち，76年に圧倒的な比重を占めていた東インドがもはや全体の36%を占めるにすぎなくなり，代ってイギリスとドイツがその比重を著しく増大させたのである。[13] なかでもイギリスは，1786年通商条約の結果フランス向け輸出を急増させ，ヨーロッパ諸国の中ではフランスに対する繊維製品の最大の供給国となった。1787—88年にイギリスから輸入された繊維製品の大部分は綿織物と毛織物であり，とくに毛織物はフランスの輸入品のほとんどがイギリス製品であったのである。[14]

表13　繊維製品の輸出先(1)　（単位　千リーヴル）

輸出先	1750年	1788年
	%	%
スペイン	40,281 (38.3)	23,739 (20.0)
ポルトガル	3,734 (3.5)	626 (0.5)
イタリア	13,899 (13.2)	14,206 (11.9)
ドイツ	14,175 (13.5)	22,864 (19.2)
スイス	1,498 (1.4)	3,001 (2.5)
イギリス	1,357 (1.3)	4,786 (4.0)
オランダ	2,158 (2.1)	919 (0.8)
ハンザ諸都市	379 (0.4)	175 (0.2)
レヴァント	16,322 (15.5)	7,671 (6.5)
アメリカ植民地	10,473 (9.9)	29,634 (24.9)
西アフリカ	993 (0.9)	9,577 (8.1)
東インド	—	733 (0.6)
その他	32 (0.03)	930 (0.8)
総計	105,303(100.0)	118,861(100.0)

ここで，眼を輸出に転じるならば，その商品別構成は前述のように，1716年から50年にかけては製造品の比重の上昇と食料の比重の低下によって，ついで1755年から88年かけては逆に製造品の比重の低下と食料の比重の上昇によって，いずれも著しい変化をとげた。いま，輸出製造品の大部分を占める繊維製品と，輸出食料のうちで最も重要な砂糖，コーヒー，ぶどう酒，蒸溜酒（ブランデー）の四品目とについて，その輸出先の構成を示すならば，表13，14，15[15]の通りである。まず繊維製品は1750年には総輸入の43%を占めていたが，その輸出先の構成には表13が示すように，1750年から1788年にいたる間に重大な変化が生じている。即ち，1750年にはスペインが繊維製品輸出の38%を集中して断然首位を占め，[16] これにはるかに遅れてレヴァント，ドイツ，イタリアがつづいているが，スペイン，レヴァント，イタリアにポルトガルを加えた地中海沿岸諸国が全体の70%を集中していることが注目をひく。これに対して，西インドを中心とするフランス領植民地はなお全体の10%強を占めるにすぎない。しかるに，88年になると，スペインの比重が大幅に低下してもはや全体の20%を

占めるにすぎなくなっており，またレヴァントの比重も50年の16%から7%へと急低下している。こうして，地中海沿岸諸国はもはやフランスの繊維製品輸

表14　繊維製品の輸出先 (2)　　(単位 千リーヴル)

輸出先	毛織物			絹織物			麻＝綿織物		
	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年
スペイン	2,851 (9.4)	2,768 (13.5)	5,710 (24.1)	2,591 (12.0)	5,746 (19.2)	999 (6.3)	16,764 (49.7)	17,884 (38.7)	12,998 (26.0)
ポルトガル	1,267 (4.2)	1,046 (5.1)	77 (0.3)	513 (2.4)	242 (0.8)	—	795 (2.4)	655 (1.4)	446 (0.9)
イタリア	5,148 (17.0)	5,354 (26.2)	6,005 (25.4)	2,906 (13.4)	4,510 (15.1)	1,589 (10.0)	2,754 (8.2)	4,000 (8.6)	1,783 (3.6)
ドイツ	1,791 (5.9)	2,431 (11.9)	2,458 (10.4)	13,204 (60.9)	15,745 (52.7)	10,798 (67.8)	2,477 (7.3)	6,192 (13.4)	3,848 (7.7)
スイス	887 (2.9)	1,380 (6.8)	1,159 (4.9)	607 (2.8)	991 (3.3)	454 (2.9)	118 (0.3)	309 (0.7)	374 (0.7)
イギリス	4 (0.01)	111 (0.5)	114 (0.5)	42 (0.2)	108 (0.4)	95 (0.6)	704 (2.1)	953 (2.1)	2,742 (5.5)
オランダ	5 (0.02)	158 (0.8)	50 (0.2)	186 (0.9)	600 (2.0)	203 (1.3)	2,208 (6.6)	462 (1.0)	454 (0.9)
レヴァント	17,290 (57.0)	6,040 (29.6)	6,516 (27.5)	140 (0.6)	329 (1.1)	240 (1.5)	459 (1.4)	449 (1.0)	49 (0.1)
アメリカ植民地	837 (2.8)	444 (2.2)	886 (3.7)	756 (3.5)	1,036 (3.5)	943 (5.9)	6,495 (19.3)	9,926 (21.5)	18,473 (37.0)
西アフリカ	45 (0.1)	231 (1.1)	378 (1.6)	13 (0.1)	253 (0.9)	227 (1.4)	701 (2.1)	5,165 (11.2)	8,438 (16.9)
東インド	—	459 (2.2)	203 (0.9)	—	100 (0.3)	173 (1.1)	—	192 (0.4)	62 (0.1)
その他	183 (0.6)	15 (0.1)	128 (0.5)	719 (3.3)	204 (0.7)	207 (1.3)	217 (0.7)	65 (0.1)	261 (0.5)
総計	30,308 (100.0)	20,437 (100.0)	23,683 (100.0)	21,677 (100.0)	29,864 (100.0)	15,928 (100.0)	33,692 (100.0)	46,253 (100.0)	49,928 (100.0)

(　) 内は各商品の輸出総額に対する各地域の構成比 (%) を示す。

出の40%弱を占めるにすぎなくなる一方，アメリカ，西アフリカ両植民地の比重が急上昇して，両者で全体の3分の1を吸収するようになっているのである。

つぎに，この輸出繊維製品の主力をなす毛織物，絹織物，麻=綿織物のおのおのについて，その輸出先の変動をよりくわしくみてみよう。表14によると，毛織物の輸出は1755年にはその57%がレヴァントに送られていたが，76年には輸出の絶対額が大きく減少したにもかかわらず，レヴァントの占める比重は30%にすぎなくなっている[17]。このレヴァント市場の後退は70年代半ばに顕著になるが，これとともに毛織物の輸出先として重要性を増したのは，イタリア，スペイン，ドイツであり，これら三国の比重は55年の32%から76年には52%に上昇し，ついで88年には60%に達するにいたった。これに対して，絹織物の輸出先としては，いずれの年度においてもドイツが圧倒的な重要性をもっている[18]。この絹織物輸出に占めるドイツの割合は，55年の61%から76年には53%に低下し，その分だけスペイン，イタリアの割合が増加しているが，しかしドイツ向け輸出の絶対額は55年に比べて76年には若干増加している。このドイツ向け絹織物輸出は70年代をつうじて増勢をつづけた後，80年代に入るとともに急激に衰退する[19]。1788年にドイツはフランスの絹織物輸出の68%を集中しているが，しかし絶対額の点では，ドイツ向け輸出は76年に比べて大幅な減少をこうむっているのである。

さらに麻=綿織物の輸出についてみると，1755年にはスペインが全体の50%を集中しており[20]，アメリカ植民地が19%でつづいていたが，76年になると，スペインの比重が39%へと低下する一方，植民地の比重がとくに西アフリカ向け輸出の激増の故に著しく増大し，33%に達している。また，絶対額ははるかに小さいがドイツ向け輸出がめざましく増加しており，またイタリア向け輸出も55年に比べてかなりの伸びを示している。麻=綿織物輸出に占めるスペインの比重の低下と植民地の比重の上昇は，80年代には一層顕著になり，88年にはスペインはもはや全体の26%を占めるにすぎず，代ってアメリカ植民地が全体の37%，西アフリカが17%，植民地全体では麻=綿織物輸出の実に54%を占めるようになった[21]。これを絶対額でみるならば，植民地向け麻=綿織物輸出は1755—88年に3.7倍に増加しているのに対して，スペイン向け輸出は1755—76年にいくらか増加した後，1776—88年には約4分の3に縮小しているのである[22]。また，1788年にはドイツ，イタリア向けの麻=綿織物輸出が76年に比べて大きく

表15　食料品の輸出先

（単位 千リーヴル）

輸出先	砂糖			コーヒー			ぶどう酒			蒸溜酒			合計		
	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年	1755年	1776年	1788年
オランダ	7,561 (27.7)	20,593 (40.2)	21,270 (33.1)	4,305 (27.2)	4,287 (14.1)	12,135 (15.1)	4,196 (24.2)	6,645 (21.8)	4,148 (12.5)	2,275 (33.8)	636 (8.4)	114 (0.7)	18,339 (27.3)	32,161 (26.9)	37,668 (19.3)
ハンザ諸都市	11,154 (40.8)	16,883 (32.9)	18,310 (28.5)	8,592 (54.2)	10,930 (36.0)	36,976 (46.0)	4,487 (25.9)	7,043 (23.3)	2,718 (8.2)	818 (12.2)	580 (7.7)	458 (2.6)	25,051 (37.3)	35,436 (29.6)	58,462 (29.9)
ドイツ	174 (0.6)	2,776 (5.4)	9,168 (14.3)	426 (2.7)	2,811 (9.2)	12,846 (16.0)	1,579 (9.1)	4,012 (13.2)	5,907 (17.8)	637 (9.5)	521 (6.9)	1,518 (8.7)	2,816 (4.2)	10,120 (8.5)	29,439 (15.1)
スイス	237 (0.9)	321 (0.6)	816 (1.3)	335 (2.1)	769 (2.5)	4,855 (6.0)	63 (0.4)	64 (0.2)	1,728 (5.2)	9 (0.1)	7 (0.1)	301 (1.7)	643 (1.0)	1,160 (1.0)	7,699 (3.9)
イギリス	59 (0.2)	74 (0.1)	211 (0.3)	15 (0.1)	91 (0.3)	48 (0.06)	1,792 (10.3)	2,599 (8.5)	4,200 (12.7)	1,445 (21.5)	1,443 (19.0)	9,224 (52.9)	3,311 (4.9)	4,207 (3.5)	13,683 (7.0)
スウェーデン・デンマーク	788 (2.9)	2,361 (4.6)	1,119 (1.7)	351 (2.2)	4,405 (14.5)	3,024 (3.8)	933 (5.4)	845 (2.8)	1,133 (3.4)	388 (5.8)	582 (7.7)	1,079 (6.2)	2,460 (3.7)	8,194 (6.8)	6,355 (3.3)
イタリア	4,554 (16.7)	5,934 (11.6)	8,191 (12.8)	922 (5.8)	1,977 (6.5)	6,357 (7.9)	638 (3.7)	1,045 (3.4)	3,437 (10.4)	192 (2.8)	364 (4.8)	268 (1.5)	6,306 (9.4)	9,320 (7.8)	18,253 (9.3)
スペイン	2,138 (7.8)	535 (1.0)	1,156 (1.8)	29 (0.2)	196 (0.6)	81 (0.1)	219 (1.3)	311 (1.0)	336 (1.0)	240 (3.6)	286 (3.8)	1,259 (7.2)	2,625 (3.9)	1,328 (1.1)	2,833 (1.5)
レヴァント	653 (2.4)	1,170 (2.3)	1,593 (2.5)	829 (5.2)	4,512 (14.8)	2,938 (3.7)	13 (0.1)	168 (0.6)	78 (0.2)	1 (0.01)	1 (0.01)	39 (0.2)	1,497 (2.2)	5,851 (4.9)	4,648 (2.4)
アメリカ植民地	—	—	22 (0.03)	5 (0.03)	—	—	3,171 (18.3)	5,858 (19.3)	6,756 (20.4)	335 (5.0)	258 (3.4)	432 (2.5)	3,511 (5.2)	6,116 (5.1)	7,210 (3.7)
西アフリカ	1	23 (0.04)	31 (0.05)	—	9 (0.03)	—	72 (0.4)	525 (1.7)	474 (1.4)	351 (5.2)	2,218 (29.3)	1,017 (5.8)	424 (0.6)	2,775 (2.3)	1,522 (0.8)
東インド	—	1	8 (0.02)	—	—	—	—	864 (2.8)	1,505 (4.5)	—	599 (7.9)	626 (3.6)	—	1,464 (1.2)	2,139 (1.1)
その他	—	594 (1.2)	2,318 (3.6)	41 (0.3)	420 (1.4)	1,215 (1.5)	164 (0.9)	441 (1.4)	682 (2.1)	36 (0.5)	85 (1.1)	1,091 (6.3)	241 (0.4)	1,540 (1.3)	5,306 (2.7)
合計	27,319 (100.0)	51,264 (100.0)	64,213 (100.0)	15,849 (100.0)	30,408 (100.0)	80,475 (100.0)	17,328 (100.0)	30,420 (100.0)	33,102 (100.0)	6,727 (100.0)	7,581 (100.0)	17,426 (100.0)	67,223 (100.0)	119,673 (100.0)	195,216 (100.0)

（　）内は各商品の輸出総額に対する各地域の構成比（%）を示す。

後退する一方，イギリス向け輸出がかなり増加した[23]ことを，つけ加えておかねばならない。

さて，以上の分析によれば，18世紀後半にフランスの総輸出に占める繊維製品の比重が著しく低下するにいたったのは，何よりも，1770年代半ばにおけるレヴァント向け毛織物輸出の急激な減少と80年代におけるドイツ向け絹織物輸出の同じく急激な減少，さらに1755—76年におけるスペイン向け麻=綿織物輸出の伸び悩みと1776—88年におけるその著しい減少，これら3点にもとづいているということができよう。たしかに18世紀後半における植民地向け麻=綿織物輸出の伸びにはめざましいものがあったが，しかしこの植民地市場の拡大とても，スペイン，レヴァント，あるいはドイツ市場の収縮[24]をカヴァーしつつ，全体としての繊維製品輸出の急速な成長をもたらしうるものではとうていなかったのである。

つぎに，砂糖，コーヒー，ぶどう酒，蒸溜酒は，全体で食料輸出の75—80%を占めており，これら四商品の輸出先の構成をみることによって，この時期にとりわけ著しい増加をとげた食料輸出がいかなる地域に向けられていたかを推しはかることができる。そこで，表15をみると，まず砂糖の輸出=再輸出先としては，ハンブルクを先頭とするハンザ諸都市とオランダとがずばぬけた重要性をもつが，1755年にはハンザ諸都市が全体の40%を占めて，オランダを遠く引きはなしているのに対して，76年には逆にオランダが40%を占め，ハンザ諸都市をぬいて首位を占めるにいたっている。砂糖の輸出は前述のように1770年代，とりわけ75年から77年にかけてめざましく増加したのであるが，このような輸出増加は何よりもオランダ市場の拡大によって可能ならしめられたのである[25]。ところで1788年になると，オランダがいぜんハンザ諸都市を抑えているものの，両者の比重はともに76年に比べて低下しており，代ってドイツの比重がにわかに高まっている。以上のほか1755年にはイタリアとスペインが砂糖輸出の4分の1近くを吸収していたが，76年になるとイタリアの比重はかなり低下し，スペインの比重はとるにたりないものとなった。

一方，コーヒーの輸出先としては，ハンザ諸都市の重要性が群を抜いているが，その全体に占める割合は1755年の54%から76年には36%に低下する。この76年には，55年にハンザ諸都市につぐ地位を占めていたオランダの比重も大きく低下し，代ってレヴァント，スウェーデン・デンマーク，ドイツの比重が

急増している。しかし，88年になると，レヴァントとスウェーデン・デンマークの比重がともに激減する一方，ハンザ諸都市が再びコーヒー輸出の46％を吸収するようになり，またオランダ，ドイツ，イタリア，スイスの各国も76年に比べてその比重を多かれ少なかれ増加させている。コーヒーの輸出額は88年には76年に比べて約2.6倍に増加しているが，この増加分の2分の1強がハンザ諸都市によって吸収されているのであって，80年代におけるコーヒー輸出のめざましい増加に対してハンザ市場の拡大が果たした役割の大きさがうかがわれる。[26]

砂糖，コーヒーという植民地物産の輸出先は以上のようであったが，つぎにフランスの特産物であるぶどう酒と蒸溜酒の輸出先をみることにしよう。再び表15によると，ぶどう酒の輸出先としては1755年，76年のいずれにおいても，ハンザ諸都市，オランダ，アメリカ植民地の三つが最も重要であり，イギリスとドイツがそれらにつづいている。また，1755—76年における輸出の増加を絶対額でみると，ハンザ諸都市，オランダ，アメリカ植民地，ドイツの四つがほぼあい等しくなっており，このぶどう酒輸出の急増期にこれら四市場がそろって拡大をとげたことがわかる。ぶどう酒の輸出は1780年代にはほとんど頭うちとなるが，88年にはその輸出先の構成に著しい変動が生じている。即ち，ハンザ諸都市とオランダの比重が76年に比べて大きく低下する一方，ドイツ，イタリア，イギリスの比重が顕著に増大し，[27] さらにアメリカ植民地がその比重を着実に増加させて，フランス産ぶどう酒の第一の輸出先となるにいたったのである。80年代におけるぶどう酒輸出の伸び悩みとは，1755—76年にその二大市場を形成していたハンザ諸都市とオランダとに対する輸出の甚だしい減少にほかならないのである。

最後に，蒸溜酒の輸出先の構成は年度によってめまぐるしく変化している。即ち，1755年にはオランダ，ついでイギリスが大きな比重を占めていたが，76年にはオランダの比重が決定的に低下し，代って西アフリカが急激に比重を増大させて，断然首位を占めるにいたっている。76年のオランダ向け輸出額は55年の30％以下にすぎず，ここに1755—76年における蒸溜酒輸出の停滞の最大の原因があることは明らかである。ところで88年になると，西アフリカの比重が大幅に低下する一方，イギリスの比重が異常な上昇をとげて全体の2分の1を超えるにいたっている。このイギリス向け蒸溜酒輸出の激増は，前述の1786年

通商条約によるイギリス側の関税引下げ[28]の結果と考えられ，これによってフランスの蒸溜酒輸出は80年代末に，18世紀で最大の伸びを経験することになったのである。

ここで，上述の砂糖，コーヒー，ぶどう酒，蒸溜酒の四つを総合して，その輸出先の構成をみることにしよう。同じく表15によると，1755，76，88のいずれの年度においてもハンザ諸都市とオランダが最大の比重を占めているが，しかし両者の比重は88年には55年に比べて明確に低下しており，代ってドイツとイギリスの比重が顕著に増加している。これら諸国のほかではイタリアが安定した割合を占めているが，全体として北および中部ヨーロッパの国々が支配的な比重を占めている。このことから，18世紀後半におけるフランスの食料輸出のめざましい増加は，何よりも北・中欧市場の拡大によって可能ならしめられたと推定することができよう。

最後に，以上の考察をもとに，第Ⅳ節で述べた輸出の地域別構成の変化が，どのような要因にもとづいているかについて，大まかな見通しを立てておこう。前掲表2，3，4によれば，フランスの主要な輸出相手地域の中で，1749—55年から1787—89年にいたる間に総輸出に占める割合が目立って低下したのは，スペイン，レヴァント，イタリア，オランダであり，反対に総輸出に占める割合が顕著に増加したのは，ハンザ諸都市，ドイツ，イギリスとアメリカ，西アフリカの両植民地であった。これらのうち，スペインとレヴァントの比重が激減したのは，何よりも繊維製品輸出の絶対的減少によるものであり[29]，イタリアの比重がかなり低下したのも繊維製品輸出の頭うちによるところが大きいであろう[30]。また，オランダの比重が1780年代に低下したのは，主として砂糖と飲料品の輸出の減少によるものと考えられる[31]。これに対して，ハンザ諸都市の比重が上昇したのは砂糖とコーヒーの輸出のめざましい増加によるものであり[32]，またドイツの比重が上昇したのも砂糖，コーヒー，ぶどう酒など食料品の輸出増加によるところが大きいと考えられる[33]。さらに，アメリカ，西アフリカ両植民地の比重の増加は，何よりも繊維製品輸出の急増によるものであろう[34]。最後に，イギリスの比重の上昇はアメリカ独立戦争後の1783—89年に限られており，かつそれは飲料品と綿花との輸出の急増にもとづいている[35]。

（1） 両表とも第Ⅴ節の注(1)に掲げた各年度の輸出入商品一覧表にもとづき作成。表10については

1788年の国別輸出入総括表（Arch. Nat., F12 1835）を併用した。

（2） レヴァントから輸入された綿の中では，綿糸が1755年に43%，76年に10%，88年に24%を占めていた。当時，フランスに輸入された綿糸の圧倒的部分はレヴァント（トルコ）からもたらされたのである。

（3） このイタリアから輸入された絹（主に生糸）は，その大部分がサルデニャ（サヴォイヤとピエモンテ）から供給された。サルデニャの比率は1755年には77%，88年にも64%に達している。

（4） このアメリカ植民地から輸入された綿はすべて綿花であった。

（5） 1776年にはイタリア諸国のうち，サルデニャからの絹輸入のみが55年に比べて激減している。1772，75，77年についても事情は同じである。前出，各年度の輸出入商品一覧表による。

（6） これらのほか，18世紀後半にフランスの総輸入に占める比重が大きく低下した国としてオランダがある。オランダからの輸入品の主要なものは右表の通りであり，ずばぬけて大きな割合を占める品目は存在しない。しかし，1750年に上位をしめていた各商品の輸入が，88年には絶対的に減少するか(香料，薬品など)，もしくは完全に伸び悩んでおり（金属，植民地産食料品など），その結果オランダからの輸入総額は1750—88年の間ほとんど伸びをみせていないのである。1750年については Morineau, op.cit., pp. 180, 190—192, 88年については対オランダ輸出入総括表（Arch. Nat., F12 1835）による。

輸入品名	1750年		1788年	
	千リーヴル	%	千リーヴル	%
香料	3,482	(15.5)	1,945	(8.3)
薬品・染料	2,390	(10.6)	2,073	(8.9)
繊維原料	2,069	(9.2)	1,844	(7.9)
麦	1,960	(8.6)	626	(2.7)
金属	1,820	(8.1)	1,894	(8.1)
植民地産食料	1,446	(6.4)	1,469	(6.3)
木材	1,274	(5.7)	675	(2.9)
繊維製品	1,001	(4.5)	1,397	(6.0)
チーズ	739	(3.3)	2,595	(11.1)
飲料品	?		2,293	(9.8)

（ ）内は輸入総額に対する各商品の構成比

（7） 輸入全体に占める繊維原料（糸をのぞく）の比重は，右表のように，1755年のレヴァントとスペインからの輸入においては圧倒的であり，イタリアからの輸入においてもかなり大きかった。しかるに，76年には繊維原料の比重はいずれの場合にも55年に比べて著しく低下している。前掲表10およびロマーノが公刊した地域別輸出額の年次統計にもとづき算定。

輸入先	1755年	1776年	1788年
レヴァント	74.9%	55.1%	54.0%
スペイン	54.5%	32.5%	17.4%
イタリア	42.5%	24.4%	41.1%

（8） 上述のように繊維原料の輸入先としては，スペイン，イタリア，レヴァントという地中海沿岸地域が支配的比重を占めていたが，その他の原料のうち鉄，銅，石炭および木材の輸入先としては，オランダ，ハンザ諸都市，ドイツ，イギリス，スウェーデン，デンマークなどの北ないし中部ヨーロッパ諸国の比重が圧倒的に大きかった。また，皮革についてはスペイン，ポルトガル，レヴァントなどが主要な輸入先であり，インジゴについてはアメリカ植民地が，コチニール（洋紅染料）についてはスペインが，それぞれ独占的な供給者となっていた。前出・各年度の輸出入商品一覧表による。

（9） アメリカ植民地からの輸入に占める砂糖，コーヒー両者の割合は，1755年67%，76年84%，88年83%というように，つねに圧倒的に大きかった。

（10） 各年度の輸出入商品一覧表により作成。

（11） 東インドからの繊維製品の輸入額は，1772—75年の年平均1,200万リーヴル程度から，76年にいたって2,200万リーヴルへと急増を示した。しかし，1772—75年においても東インドがフラ

ンスの最も重要な繊維製品輸入先である事実に変わりはなかったものと考えられる。Cf. Chaptal, *op. cit.*, t. I, pp. 133 sqq.

(12) ここでわれわれは，1780年代末の「貿易自由化」に先立って，ドイツ（とくにフランドル）を先頭とするヨーロッパ諸国から相当量の繊維製品がフランスに輸入されていた事実に注目しておきたい。フランス絶対王政政府は17世紀後半よりイギリス，オランダの毛織物の輸入を力をつくして阻止しようとしたが，両国以外からの繊維製品の輸入に対しては比較的軽度の関税しか課さなかった。ところが，「関税制度を論じた歴史家達は，輸入禁止が18世紀には外国商品一般にではなく，イギリス商品にのみ適用される制度であったことを，十分明確に指摘しなかった」（Arnauné, *op. cit.*, p. 31）のである。

(13) フランスの総輸入にしめるイギリスとドイツの比重は，1771—77年に比べて1787—89年には著しく増大しているが(前掲表2参照)，この比重増大に対して最も大きく貢献したのは両国からの繊維製品輸入の急増であった。

(14) 1787年にはイギリスから輸入された繊維製品1,790万リーヴルのうち毛織物が36%，綿織物が39%をそれぞれ占めており，88年には繊維製品の輸入額1,910万リーヴルのうち毛織物が29%綿織物が32%をしめている。なお，両年度ともイギリス以外からの毛織物としてはドイツからの少量の輸入を確認しうるにとどまる。1787，88年の国別輸出入総括表（Arch. Nat., F^{12} 1835）による。

(15) 3表とも，それぞれの年度の輸出入商品一覧表または総括表（既出）にもとづき作成。

(16) この1750年におけるスペイン向け輸出繊維製品の内訳は右表の通り。

	千リーヴル	%
麻=綿織物	16,891	(41.9)
絹織物	5,301	(13.2)
毛織物	5,090	(12.6)
靴下	3,821	(9.5)
レース	3,680	(9.1)
リボン	3,343	(8.3)
錦織	952	(2.4)
帽子	822	(2.0)
その他	381	(0.9)
合計	40,281	(100.0)

(17) このレヴァント向け輸出毛織物は，ほとんどすべて「ロンドン風毛織物」(londrins) と呼ばれる薄手の中質毛織物であった。貿易差額事務局の統計によると，この種の毛織物のレヴァント向け輸出額は1750—56年には年平均1,600万リーヴルに上っており，1766—73年にもほぼ同じ水準にあったものと推測される。しかるに，この輸出額は74—76年に激減して76—78年には年平均650万リーヴルにすぎなくなり，87—90年にも平均710万リーヴルにとどまったのである。各年度の輸出額については，第V節の注（11）に記した諸史料のほか，1750，51年のレヴァント貿易商品一覧表（Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Mémoire de commerce 84），1752年の対ヨーロッパ輸出入商品一覧表（Bibl. Mun. de Rouen, Montbret 849），1789，90年のマルセイユ港輸出統計（Arch. Nat., F^{12} 1666 et 1669）を参照。

ところで，このレヴァント向け毛織物輸出の推移については，レヴァント貿易の独占基地であったマルセイユ港の史料（毛織物検査所の統計等）に依拠した研究が，既にいくつか行なわれている。たとえば，P.マソンの研究は，レヴァント向け毛織物の輸出量（反数）が1763—73年を頂点として（最高は1772年），1774—89年には大幅に減少したことを明らかにしている。マソンはこの輸出衰退の原因として，1768—74年のロシア=トルコ戦争によるオスマン帝国の荒廃，人口減少，全般的貧困化をあげているが，彼の分析結果は筆者のそれと基本的に一致する。Masson, *op. cit.*, pp. 414—415, 476—490. これに対して，M.モリノーとCh.カリエールが作成した時系列によれば，マルセイユからのレヴァント向け毛織物輸出量は1776年まで増勢をつづけており，1767—76年の平均輸出量90,454半反は1752—56年の65,227半反をはるかに上まわっている。M. Morineau et Ch. Carrière, Draps du Languedoc et commerce du

Levant au XVIIIe siècle, *Revue d'histoire économique et sociale*, vol.46, no1, 1968, pp. 109—111. ここには明らかに筆者の分析結果との食い違いが見出される。このようなギャップが生じてくる原因については現在のところ，明確にできない。たしかに，1770年ごろには輸出毛織物の単価が50年代に比べて著しく低下しており，輸出量の増大がそのまま輸出額の増大としては現われないことに注意しなければならないが，その点を考慮しても，筆者が利用した貿易統計において1750年代の毛織物輸出額が過大評価となっている可能性はいぜんとして残る。

(18) ただし，このドイツへ輸出された絹織物のかなりの部分は，ライプツィヒ，フランクフルト=アム=マインの両大市を通じて，ポーランド，ハンガリー，ロシア，スカンディナヴィア諸国，イタリアなどへ再輸出されたものとみられる。Cf. P. Léon, (sous la dir. de), *Aires et structures du commerce français au XVIIIe siècle*, Lyon, 1975, p. XI.

	千リーヴル
1777年	19,758
1778〃	18,460
1779〃	21,268
1780〃	23,761
1782〃	11,228
1787〃	9,472

(19) ドイツ向け絹織物輸出の推移は右上の表の通り（既出，各年度の輸出入商品一覧表による）。

(20) このスペインへ輸出された麻=綿織物はそのほとんどが麻織物（より正確には亜麻織物）であり，かつその大部分はスペインのカディス港を経由して，同国のアメリカ植民地へ送られていたのである。この点は1770—80年代においても同様である。

(21) ただし，ひとくちに植民地向け輸出といっても，アメリカ向け麻=綿織物が圧倒的にフランス国産品からなっていたのに対して，西アフリカ向けはその70—75%が東インド産の綿織物であったことに，注意する必要がある。この点については，Tarrade, *op. cit.*, t. I, p. 126；前掲拙稿「フランス植民地貿易」，34頁，を参照。

(22) スペイン向け麻=綿織物輸出は右表が示すように，アメリカ独立戦争のため1777—80年に大きく減少したのち，80年代にも70年代の水準に回復することがなかったのである（既出，各年度の輸出入商品一覧表による）。このような輸出の縮小に対しては，スペイン国王カルロス3世による保護貿易政策の強化が少なからず影響したと考えられる。即ち，綿織物，捺染キャラコ等のスペイン領アメリカへの輸入禁止（1778年王令），1689年以来のフランス商品に関する特恵関税協定 Convenio d'Eminente の廃止(79年王令)，麻織物輸入関税の著しい引上げ（82年関税法）である。フランスの麻織物は1779年まではスペインへの輸入にさいして従価5%の関税を支払うにすぎなかったが，今や従価20—25%の，即ちドイツの麻織物の約2倍の，関税を支払わねばならなくなったという。これらの点については，Cf. G. Rambert, La France et la politique commerciale de l'Espagne au XVIIIe siècle, *Revue d'hist. mod. et contemp.*, t. 6, no4, 1959, pp. 284—285; J. Tanguy, La production et le commerce des toiles ≪bretagnes≫ du XVIe au XVIIIe siècle, *Actes du 91e congrès national des sociétés savantes*, Rennes, 1966, Paris, 1969, p. 122.

	千リーヴル
1776年	17,884
1777〃	14,034
1778〃	9,101
1779〃	10,888
1780〃	7,349
1782〃	10,283
1787〃	10,826
1788〃	12,998

(23) このイギリス向け麻=綿織物は，その78%がフランス特産品たるバチスト麻布であった。1788年の対イギリス輸出入総括表(Arch. Nat., F12 1835) による。

(24) 前掲表13によれば，ドイツは18世紀後半にフランス繊維製品の輸出市場としての意義を増したようにみえる。しかし，実際にはドイツ市場の比重が増大したのは1750—80年の間であり，80年代には絹織物輸出の激減によってこの比重は明らかに低下したのである。

(25) フランスの砂糖輸出額が18世紀の最高を記録した1777年において，オランダは全体の44%に当る3,400万リーヴルを集中している。Cf. Morineau, Le commerce franco-néerlandais, p. 220.

(26) なかでもハンブルクの意義が圧倒的に大きかった。前掲拙稿「フランス植民地貿易」，29頁参照。

(27) イギリスは1786年通商条約によってフランス産ぶどう酒に対する関税を従来の約2分の1に引下げたので，87年よりイギリス向けぶどう酒輸出は著しい増加を示した。しかし，イギリスはいぜんポルトガル産ぶどう酒に特恵待遇を与えていたため，フランス産ぶどう酒のイギリス向け輸出の伸びは，当初期待されたほどめざましいものではなかった。以上の点については，Cf. Arnauné, *op. cit.*, pp. 102—103.

(28) この通商条約によってイギリスは，フランス産蒸溜酒に対する関税を従来の1ガロン当り9シリング6ペンス20分の12から，7シリングへと引下げた。*Ibid.*, p. 96；松尾太郎・前掲書，135頁。

(29) スペイン向け輸出がフランスの総輸出の23.7%を占めていた1750年において，繊維製品はスペイン向け輸出の70%を占めていたが，スペイン向け輸出の比重が10.9%に低下した1788年には，繊維製品の比重も46.7%に低下している。また，レヴァント向け輸出に占める繊維製品の割合も，1750年の68.3%から88年には40.7%へと低下した。既出，1750年の地域別輸出入商品一覧表および88年の総括表により計算。

(30) イタリア向け輸出がフランスの総輸出の14.9%を占めていた1750年において，繊維製品はその38.3%を占めていたが，イタリア向け輸出の比重が10.3%に低下した1788年には，繊維製品の比重も29.6%に低下した。前注と同じ史料による。

(31) オランダ向け輸出に占めるぶどう酒と蒸溜酒の割合は，1776年の19.0%から88年には9.3%に，また砂糖の割合は，76年の53.7%から88年の46.5%にと，いずれも低下している。前掲表15およびロマーノの地域別輸出入額統計，さらに88年の国別輸出入総括表により計算。

(32) ハンザ諸都市向け輸出に占める砂糖とコーヒーの割合は，1755年の63.8%から76年には73.5%へ，さらに88年には85.9%へというように，増加の一途をたどった。注(31)と同じ史料による。

(33) ドイツ向け輸出に占める砂糖・コーヒー・ぶどう酒の割合は，1755年の5.9%から76年には18.9%にふえ，ついで88年には40.6%へと急上昇をとげた。注(31)と同じ史料による。

(34) アメリカ植民地向け輸出に占める繊維製品の比重は，1750年に38.8%，88年に38.6%と一貫して大きく，また西アフリカ向け輸出に占める繊維製品の比重は，1750年の28.6%から88年には57.1%へと大幅に上昇した。地域別輸出入商品一覧表または総括表により計算。

(35) イギリス向け輸出総額，飲料品輸出，綿花輸出の推移は右表の通りである。対イギリス輸出入総括表(Arch. Nat., F[12] 1835) による。なお，綿花輸出量の変動についてはCf. Tarrade, *op. cit.*, t. II, p. 753.

年	輸出総額	飲料品		綿花	
	千リーヴル	千リーヴル	%	千リーヴル	%
1783	15,955	5,741	(36.0)	—	
1784	20,017	8,583	(42.9)	750	(3.8)
1787	34,201	13,545	(39.6)	7,248	(21.2)
1788	31,155	13,492	(43.3)	4,459	(14.3)

おわりに

以上数節にわたって考察したところから，18世紀におけるフランス対外貿易の展開過程は，およそ次のようにまとめられるであろう。フランス対外貿易は18世紀の初頭から中葉にかけてとりわけ急速な成長をとげた。この時期には，

地中海諸国から供給される繊維原料を先頭に，工業原料の輸入がめざましく増加する一方，製造品の輸出が著しい伸びを示し，とくにスペイン，レヴァント，ドイツに対する繊維製品の輸出が急増をとげた。これに対して，食料の輸入と輸出の伸びは全体としては緩慢であったが，その中で砂糖，コーヒーなど植民地産食料品の輸入と，そのヨーロッパ諸国への再輸出とは，著しい発展をとげた。こうしてフランス対外貿易は，18世紀初頭の食料の輸入と輸出を基軸とした構造から，世紀の中葉には，原料の輸入と製造品の輸出とを基軸とした，未だ早熟的ながら工業国型の構造へと，転換をとげるにいたったのである。

しかし，このようなフランス対外貿易の発展様式には18世紀の後半に入ると明白な変化が生じ，貿易の成長速度は世紀の前半に比べてはるかに緩慢となった。たしかに1780年代には，輸入と輸出の両面で成長の新たな加速化がみられたが，全般的にみて18世紀後半の貿易の成長率が世紀前半のそれを下まわったことは明らかである。繊維原料をはじめとする工業原料の輸入は，1750年代から70年代にかけて頭うちとなったのち，80年代に著しい増加を示したが，フランスの総輸入に占める原料の比重は，80年代末においても世紀の中葉に比べて大幅に低下している。製造品の輸出も18世紀の後半にはごくわずかしか増加しておらず，その主力をなす繊維製品の輸出は，アメリカ，西アフリカの植民地市場の急速な拡大にもかかわらず，スペイン，レヴァント両市場，さらにはドイツ市場の収縮によって甚だしい伸び悩みを示している。これに反して，この時期には食料の輸入と輸出が急速に増大したが，なかでも砂糖，コーヒーなど植民地産食料品の伸びはめざましく，80年代末には総輸入および総輸出の約3分の1を占めるにいたった。こうしてフランス対外貿易は18世紀後半のうちに，食料の輸入と輸出を基軸とした構造へと再転換をとげたのであるが，しかしこの輸出入食料の中では，植民地産品の占める比重が18世紀の初頭に比べて格段に増大するにいたったのである。

以上に述べたように，フランス製造品の輸出の伸びは18世紀の前半においてとりわけ急速であり，世紀の後半には目立って緩慢化した。フランスの総輸出に占める製造品の割合は世紀の前半には明確に上昇を示し，1750—55年頃には総輸出の半ばを確実に超えていたのであるが，世紀の後半には傾向的に低下をつづけて，80年代末には総輸入の3分の1前後にすぎなくなっている。ここでいま一度注意しておきたいのは，このような製造品輸出の成長リズムが同じ時

期におけるフランス工業生産の成長リズムと基本的に一致するようにみえることである。即ち，第Ⅰ節で述べたように，フランス諸工業の成長は18世紀の後半に入るとともに次第に緩慢化し，とくに70年代からは停滞の様相を強めて行ったとされているが，このような工業成長の緩慢化ないし停滞化は同じ時期における製造品輸出の伸び悩みのうちに明瞭に反映されていると同時に，なんらかの程度において輸出市場の収縮によって規定されていたものと考えられるのである。[1]

最後に，18世紀の後半にフランスが国際貿易においてどのような地位を占めていたかについて一言しておきたい。上述のように1750年代から80年代末にかけてフランスの製造品輸出が著しい伸び悩みを示したとするならば，少なくとも工業製品の輸出貿易の分野でフランスの国際的地位がこの間にかなり低下したことは疑いをいれないであろう。クルーゼは，「1770年以後フランスの生産物の競争力が弱まり，フランス産品がレヴァントとスペインおよびスペイン領アメリカにおいて地歩を失った形跡がある」[2]と指摘しているが，この点は本稿の分析によっても確認されたところである。たしかにフランスの繊維製品は18世紀後半に，スペイン市場においてはイギリスの毛織物およびドイツの麻織物との競争により，レヴァント市場においてはイギリス，ドイツ，ヴェネツィアの毛織物との競争によって，後退を余儀なくされつつあった。[3]だがそれにもかかわらず，この両市場への繊維製品の輸出においてフランスが1790年代の初めまで他の諸国にまさる地位を占めていたことは確実と思われる。[4]イギリスがレヴァント市場およびスペイン領アメリカ市場をその支配下に収めるためには1792—1815年のフランス革命=ナポレオン戦争をまたねばならなかったのである。[5]

（1） ただし，この工業成長の緩慢化と製造品輸出市場の収縮との相互規定的関係については，なお不明の点が多く，結論を保留せざるをえない。その解明のためには今後，工業部門別・地域別の実証的分析を行なう必要があろう。本稿ではただ，工業生産の動きと製造品輸出の動きとの並行性を確認しうるにとどまる。

（2） Crouzet, Angleterre et France, p. 264.

（3） スペインについては，Rambert, La France et la politique commerciale, p. 285 ; Tanguy, op. cit., p. 121. レヴァントについては，Masson, *op. cit.*, p. 491 ; Morineau et Carrière, op. cit., p. 119 を参照。

（4） ドルニックの分析によれば，1791年にスペイン本国への各国の織物輸入額は次頁の表の通りであった。Fr. Dornic, *L'industrie textile dans le Maine et ses débouchés internationaux (1650—1815)*, Le Mans, 1955, pp. 235—236 により作成。

	毛織物	絹織物	麻=綿織物	全商品
	百万レアル	百万レアル	百万レアル	百万レアル
フランス	23	24	79	163
イギリス	69	?	12	137
ドイツ	?	?	82	101
オランダ	0.5	?	?	60

これによると，フランスはスペインに対する毛織物の供給額の点でイギリスに遠く及ばず，また麻=綿織物の供給額の点でもドイツに遅れをとっていたが，しかし絹織物をも含む繊維製品全体の供給額の点では疑いもなくイギリス，ドイツをしのいでいたのである。このことは，少なくともスペイン本国(カディス)を経由してのスペイン領アメリカ向け輸出に関するかぎり，フランスが18世紀末まで列強中第一位を占めていたことを意味するであろう。

レヴァント=トルコ貿易におけるフランスの優位は一層明瞭であり，フランス人は1780年代末にオスマン帝国の全貿易の少なくとも40%を掌握していたといわれる。フランスのレヴァント向け繊維製品輸出額は87年に788万リーヴル，88年に767万リーヴルにのぼったが，同じ頃イギリスの対レヴァント貿易額は輸出入を合わせて約1,000万リーヴルであり，オランダのレヴァント向け輸出額は500万リーヴル，ヴェネツィアのそれは400万リーヴルであった。1787，88年の対レヴァント輸出入総括表（Arch. Nat., F^{12} 1835）のほか，M. Devèze, *L'Europe et le monde à la fin du XVIIIe siècle*, Paris, 1970, p. 63 を参照。

（5） さらに，この間仏領サン=ドマングの独立（1804年）によってフランス旧植民地帝国が事実上崩壊したことを合わせ考えるならば，フランスが17世紀以来の海外輸出市場の争奪戦においてイギリスに決定的に敗北したのは，1756—63年の七年戦争を画期としてではなく，フランス革命=ナポレオン戦争を画期としてであるといわなければならない。なお，1792年以降のフランス対外貿易の衰退と変容については，稿を改めて詳しく論じる所存である。

〔付記〕 本稿の作成にあたり，資料蒐集について大変お世話になったフランスの文書館・図書館関係者各位および堀井敏夫氏，また Romano 論文の閲読のために御蔵書を拝借させて頂いた永井三明氏に，深い謝意を表する。